七戸町立 鷹山宇一記念美術館

第37号
【平成16年12月15日】

SUPORTERS CLUB NEWS
友の会 会報
TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501
青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94
七戸町立鷹山宇一記念美術館内
鷹山宇一記念美術館友の会
TEL 0176-62-5858 FAX 0176-62-5860
E-mail takayama-museum@town.shichinohe.aomori.jp

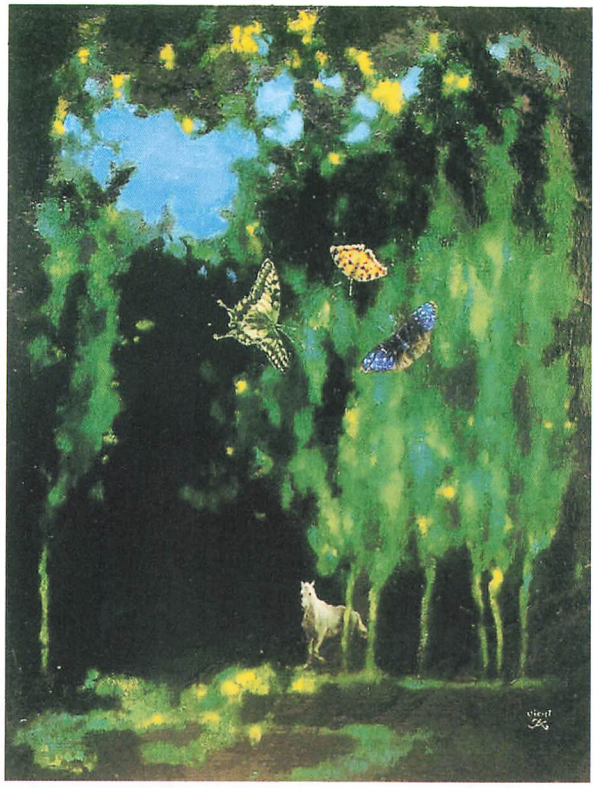
十周年記念特集号

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

鷹山宇一記念美術館開館から3ヶ月後の平成6年11月19日、203名で誕生した私たち「鷹山宇一記念美術館友の会」が、創立10周年を迎えました。本号は、その記念事業の一環として、これまでの活動などを紹介する特集号としてお届けします。

表紙の鷹山宇一先生の2作品は、友の会の指定寄付金を作品購入費の一部として財団が購入したものです。平成16年度総会の席上で報告しましたが、カラー写真で皆様にご披露致します。これからも美術講演会、研修旅行や会報の発行など会員相互に研鑽を積みながら、魅力ある活動を続けて参りたいと考えております。

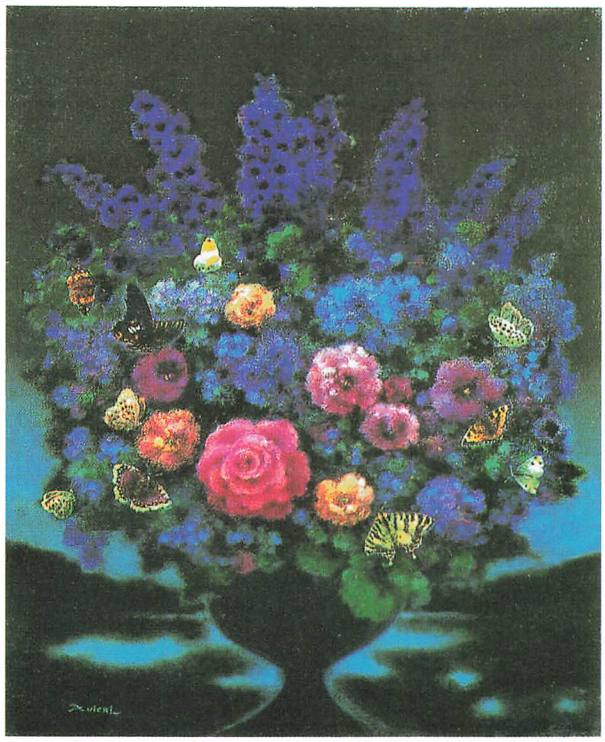
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇



「森 の 馬」F6号

鷹山宇一先生の言葉

私が画室(ここ)に座って描いているでしょ
蝶が見えるね！
ランプが見えるからね
絵だって あんた
ランプの美しさに負けちゃいけないから
だから こっちもね
きれいな絵を描く
そういうことなんですよ



「湖畔の花」 1992年 春季二科展出品作 F12号

会長挨拶

…see the new decade

次代を見据えて

友の会会長　山本洋一

鷹山宇一記念美術館友の会は、本年11月19日をもって設立10周年を迎えました。

これまで友の会の活動を通じて美術館に絶大なご支援をお寄せくださいました会員の皆様に改めて心より御礼申し上げます。

友の会は設立の精神である、「友の会活動を通じたサービスの提供」「会員の相互交流と自己啓発」「美術館運営に対する協力」を基本に、皆様のご参加・ご協力をいただきながら様々な事業を実施してまいりました。

毎年実施しております研修旅行・これまでに36号を数える会報の発行・企画展等の運営に対する監視ボランティア活動・絵画購入基金の積立などです。

特に基金の積立については、平成16年6月の友の会総会において設立10周年を記念する事業として、これまで数年間にわたり絵画購入基金として積み立ててまいりました資金百万円を、美術館を運営する財団法人鷹山宇一記念美術振興会に贈呈いたしました。

友の会では絵画購入指定寄付金として平成13年度にも百万円を寄付しておりますので、この10年間での累計の寄付金は二百万円となります。

この資金は平成15年度に財団法人鷹山宇一記念美術振興会で収集した鷹山先生の絵画2点「森の馬」（油彩40.0×31.5cm）と「湖畔の花」（油彩61.0×50.0cm）の購入に役立てていただきました。

この2点の作品は、友の会会報としては初めての試みであるカラー印刷で今回の特集号の巻頭に掲載いたしました。

美術館の重要な役割である作品の収集に役立つことができ、友の会会員として誇りを持ってこれらの作品に接することができると思います。

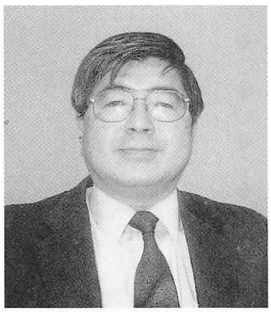
小原恭平美術館初代館長は、友の会会報第一号に寄稿されたメッセージの中で次のように述べられています。

「美は永遠であり、友もまた永遠なる絆をもって結ばれる。・・・」

この文に触れるとき私はまた、「Will The Circle Be Unbroken ?」（永遠の絆）という古いアメリカの民謡を思い起こし、これまで美術館のためにお力添えをいただいた故人の方々との絆を思い出すのです。

美術館の用務のため度々上京され、あの地下鉄サリン事件にも遭遇された小原恭平元館長。

10年前の文化村グランドオープン前日、入院先からひそかに館を訪れ「思い残すことはない」と涙され、まもなく逝かれた谷村保雄七戸町元開発室長。



ランプ館天井のステンドグラスの制作者であり、かつてご両親が七戸町で暮らされたという不思議なご縁のある池内康さん。

鷹山宇一記念美術館のユニークな設計を担当され、完成を見ることなく逝かれた宮内康所長。

七戸町文化協会会長でもあり、財団創設以来の理事であられた石田勲氏。

七戸文化村の「道の駅」指定にご尽力され、県知事はじめ各方面に当美術館の意義を熱心に強調してくださった小原文平元青森県議会議長。

この10年間をふり返り、今は亡き皆々様の面影を瞼の裏に浮かべ、瞑目しつつ合掌いたしたいと思います。

今、美術館の館長室には、「北耀」という書が掲げられています。

この書は、美術館の門出を祝して書家としても著名な二科会の西野嘉斎先生が館に寄せられものです。

北辺の地であるこの七戸町の美術館に寄せる私たちの志を、「耀」と評してくださった先生方の気持ちに応えるべく、これからも微力を尽くしてまいりたいと考えております。

今後ともよろしくお願いいたします。

「友の会」創立メッセージ

「赤い鳥」の飛翔

初代美術館長　小原恭平

メーテルリンクは、とうとう幸福の「青い鳥」を手に入れることが叶わなかった。

大正中期、鈴木三重吉主宰の「赤い鳥」の創刊は、世に新鮮な文芸ブームを捲き起こした。

鷹山画伯は幼年時代その文芸雑誌「赤い鳥」に大変な感銘を受けられ、絵画に対する鬱勃たる情熱が湧き上がり、それ以来一筋七十年以上美の世界を追求されている。

その珠玉の名品が画伯の郷土七戸町によみがえり、それが七戸町立鷹山宇一記念美術館の誕生である。当美術館は七戸町の誇りであり、七戸町独自の美への灯台である。

万余ばかりの人口の町であっても、鷹山美術を狼火として、町の人たちがそして辺りの心ある人たちが支えとなって、二十一世紀の懸け橋ならんと、早速鷹山宇一記念美術館「友の会」が創られた。有り難く心強い限りである。

美は永遠であり、友もまた永遠なる絆をもって結ばれる。このお互いの魂の触れあいの中から、新しい文化の創造がふくらみ開花してゆく。

「赤い鳥」の飛翔が、今でも天空に舞って我々を照射し続けているように、我々も又……

（会報創刊第一号に寄せられたメッセージを再録いたしました。）

お祝いの言葉

七戸町長　福士孝衛

鷹山宇一記念美術館友の会が創立10周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げますとともに、この10年間、友の会の振興に努めてこられました会長はじめ役員の方々並びに会員の皆様のご尽力に対しまして、深く敬意を表するものであります。

鷹山宇一記念美術館が開館してわずか3ヶ月で有志の方々が美術館の応援団として「友の会」を設立。これまで美術館行事への積極的な参加、自主的な事業の企画実施、さらに物心両面にわたるご協力を賜りましたことに対しまして、地域活性化にとってモデルともなるべき活動、業績であると、町としても深く感謝いたしております。

さて、会報には企画展の紹介や研修旅行記、他美術館の紹介などが掲載され、私も毎号楽しく読ませて頂いております。会報は、開かれた美術館活動の一翼を担う役割を果たし、美術館と会員とを結ぶ大きな絆となっており、会員の一人として常々感謝いたしております。

どうか、会員の皆様が研鑽を積み、友の会活動に積極的に参加され、美術館のさらなる活性化にご尽力頂きますよう心からお願い申し上げますとともに、鷹山宇一記念美術館友の会の益々の発展をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉と致します。

拙い短歌ではありますが、会報10周年記念号にあたり捧げます。

美術館　めぐりて帰る
我が町は　秋の夕暮れ
絵画のごとし
故郷の　小さき町の美術館
日溜まりのごと
人の集えり
美術館　愛でて集いし
友ら皆　日和の如き
心持ち居り

(財)鷹山宇一記念美術振興会　理事長　青山浄晃

友の会は、平成6年11月19日にスタート。私もその設立総会に出席し、一会員として今後の友の会の発展を期待したものでした。その後漸増し、今では会員数360名を超えて隆々たる勢いに育ったと聞き、会員の皆様方のご努力に深い感銘を覚えます。

友の会の主な事業を列記すると、県内の企画展はもとより岩手県萬鉄五郎美術館、北海道立函館美術館、宮城県立美術館など、時々の企画展に併せたタイムリーな研修旅行を20回以上も実施しており、さらに平成12年にスペイン・パリ美術紀行、平成16年にはイタリア・ルネッサンス美術紀行など海外へも足を伸ばし研鑽を積んでおります。このような友の会の積極的な企画力が会発展の原動力であり、今後とも継続して下さることを切望しております。

また、鷹山宇一記念美術館の企画展においては監視ボランティアを務めて頂いているほか、財団には絵画購入資金として多額のご寄付を頂くなど物心両面にわたる応援を頂戴しております。

平成13年11月に七戸町より「しちのへ活性化大賞」を頂き、平素の美術館活動に対しお誉めのことばを頂きました。これも、ひとえに友の会の会員の皆様のおかげと感謝申し上げます。

現在、鷹山賞児童作品展と地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展が開かれていますが、郡内外からたくさん足を運んで頂き、親子での来館が多く、必ずや将来佳い実を結んでくれるものと心楽しみにしております。

緑深い七戸の美術館と共に歩んで下さっている友の会の一層の発展を祈りながら、お祝いの言葉と致します。

鷹山宇一記念美術館　館長　鷹山ひばり

館長に就任して6年の歳月が過ぎ去りました。

平成11年4月に開催した「平山郁夫展」は連日大盛況で、この展覧会の入館者は1万5千人にものぼりました。

最終日、最後の来館者をお見送りをしたあと、目頭が熱くなった私は溢れる涙を押さえることができなくなりました。

突然、後ろから大きな拍手が鳴り響き、驚いて振り向くとそこには「友の会」の皆様が並び立ち、「平山展」の大成功を祝して下さいました。

―初仕事を終えた刻を共に安堵をしてくれた「仲間」がいた―　何年たっても、この大きな感動を決して忘れることがないでしょう。

人間の仕事は一人、一個の力によるものではありません。家にあっては家族の隠れた力があり、社会においては、それぞれの統制のある努力が不可欠であります。この陰の力に一人でも足らざる人があれば、事業は思わぬ蹉跌を踏むこととなります。

「同志」と申し上げたら皆様方に失礼になりますが、ご多忙の中、常に「見返りを求めない無償の愛」を捧げて下さる「友の会」の存在が「鷹山宇一記念美術館」の事業運営の根幹をなしていることは紛れもない真実です。

全国あまたある美術館等の「友の会」をみても、当館ほど存在感のある「友の会」は稀で、私は大きな誇りとしております。それにいたしましても、父、鷹山宇一は何と云う幸せ者でございましょうか。娘として皆様方に厚く御礼を申し上げるばかりであります。

「友の会」の益々のご発展を心より祈念いたします。

会員からのお便り

10周年記念にあたり、会員の方々から心温まるお便りを頂きました。ありがとうございます。

友の会創立10周年にあたって

二科会青森支部長　青森市　安田　勝子

友の会10周年記念おめでとうございます。

美術館創立と共に歩み、多くの企画を成功させ成果をあげてきました事を、この上ない喜びと感じております。

特に毎年行われています特別企画展では、想いもよらない作品に出遭い、驚きと感動の連続です。

この北国の、ましてや小さな美術館からの大きな大きなプレゼントです。普段は到底目にすることの出来ない作品が、居ながらにして観られる幸せに感謝しております。

今年も、見事な日本画の「さくら・桜展」、人々に生きる幸せを与えてくれた「花の詩画展」、優しく懐に抱かれるような「織田廣喜展」、これ等はみな眼を見張る様な企画展ばかりです。

先だって、東北の文化を取り上げている月刊誌「白い国の詩」を見ましたが、8月号から、この冊子の美術館・博物館ガイド欄に、七戸町立鷹山宇一記念美術館が掲載されていました。

この様な冊子に掲載されるのに、10年以上の実績が無いと取り扱って戴けないとも聞いております。

たった二、三行の紹介欄ですが、10年の長いときを秘めて、堂々とした風格を漂わせながら、納まっている様に感じました。

これからも闊達で感性豊かなスタッフの皆さんにより、文化の発信基地として、魅力ある催し物が企画されることを、大いに期待しております。

また春季二科展では、私ども支部が大変お世話になっております。

これからも、皆様方のご指導を仰ぎながら頑張ってまいりたいと思っております。

改めて関係者の皆様方に、感謝とお礼を申し上げ、益々のご発展を心からお祈り致します。

鷹山宇一記念美術館友の会創立10周年に寄せて

八戸市　白石　昭宣

友の会創立10周年おめでとうございます。友の会に加入したきっかけは、宇一画伯の一枚の絵との出会いでした。魅力的な深い紺色の夕闇とネオンを背景にした、一輪のバラの花と紫のパンジーの周りを数匹の蝶が飛び交う絵でした。まだ美術館が建設される前のことでした。辛い時や悲しい時など、私の心を癒し、慰め励ましてくれました。

美術館がオープンした日も友人と連れ立ってセレモニーを見学に行ったものでした。その時初めて、遠くから宇一画伯にお目にかかることが出来ました。それから10年、素晴らしい独自の企画と内容のもとに、県内外の多くの方々に芸術・文化への深い感動と感銘を与え、その成果と共に美術館の素晴らしさを多方面に発信して下さいました。そのことを会員の一人として誇りに思っております。

また研修旅行でも、内容の濃い展覧会をコースに入れ、親切な案内と共に会員同志の親睦を図りながら、思い出に残る研修をさせて頂いたことも、担当された方々の細やかな配慮の賜物と感謝しております。今後とも是非継続して頂きたいものと思っております。

新幹線が八戸までの開業となり、首都圏からの観光客も多くなった現在、一人でも多くの方々に来館して頂くように、特に交通面（三沢駅ー美術館の運行バス等）での整備も必要となってくることと思います。地方から逆に中央へ文化を発信し、美術館のあり方、友の会のあり方を問う機会になることと思います。

これからも私達の文化的財産である鷹山宇一記念美術館の建設の精神を大切にし、友の会、地域住民はもとより、県民一体となって守り育てていきたいものと思います。10周年という大きな節目を契機に美術館及び友の会のさらなる発展と躍進を心から念願して止みません。

友の会創立10周年おめでとうございます

天間林村　工藤喜代子

私が友の会を知り会員になったのは、第1回目の海外研修に誘われたことがキッカケでした。美術に対しては無関心、それ以上に絵を描けなかった苦い思い出の中学校時代を思い出しコンプレックスにさえなっていました。絵に対しての知識はいらないから海外旅行を楽しもうという誘いに気を取り直し初めての海外、スペインへ。教科書で見たことのある絵が、目の前に！本物なんだと感激はしたものの、見ていて何がいいのかサッパリわからず、ブツブツ言っていた所、一緒に行った先輩の方から「だまってジィーと見ていると何か感じてくるものよ」と言われた一言で目がさめ、気ばることをせず、ゆったりした気持で見ているうち、心が落ちつき、言葉で上手に現せないが何か感じて、気持が豊かになったようでした。帰ってからは、小川敏雄先生の勧めもあり、絵を描くことに挑戦しました。未熟な自分の絵が先生の一筆で、パッと見ちがえ、まるで魔法使いみたいと感動するなど今迄の人生にない楽しさを見つけることができました。今は、体調、仕事の都合で絵を描いてはいませんが、見る楽しみは、膨らんで来ています。出かけた先で絵をみつけると、絵の前でじっくりと見て楽しめる自分がいます。そして、ステキな仲間もできました。すべて友の会の会員になったおかげと感謝しています。

温かい交流の場

東京都　浜中　央子

友の会創立10周年、おめでとうございます。

ボランティアとして展覧会運営には無くてはな

らない存在となり、研修旅行では県内外、果ては遠くヨーロッパまで足を伸ばすフットワークを発揮し、「火曜サロン」、「絵画クラブ」などの自主的な輪が広がる雰囲気が生まれ、この10年の「友の会」の足跡を今改めて振り返りますと、多くの方々がそれぞれの得意分野で鷹山宇一記念美術館の友の会らしい美術との関わり方を提示し続けてくださったお陰であると思っております。

参加するだけの私のような会員にとりましては、10年の歩みの中で友の会が常に進化し続けていることが何よりの会の魅力であると思っております。今は遠方におりまして、残念ながらあまり参加することが出来ないのですが、定期的に届く会報で皆様の活動記や次回のイベントの告知を目にするだけでも、半分は自分も参加したような気分になり、会と繋がっている喜びを実感しております。

地元七戸以外にも友の会メンバーが数多くいらっしゃると聞いております。以前、研修旅行で弘前に行きました折、弘前在住会員の方々が、我々の到着を駐車場まで出迎えてくださいました。初代館長さんの古いご友人は東京にお住まいですが、設立当初から友の会のお仲間に加わり、七戸の美術館を応援し続けてくださっています。友の会でこの方々に出会えました時は、七戸出身の者として何ともいえない嬉しい気持になったものです。

これからも「美術好き」ということを共通項に、多くの人に出会えることを楽しみにしております。

ネット上の「出会い系」では不安がありますが・・・「鷹山宇一記念美術館友の会」は温かい交流の実績がある素敵な場ですので、皆さんでどんどん輪を広げて次の10年も楽しい活動をしていきましょう。

おらほの美術館

十和田市　小向　慎

二科の重鎮吉井淳二氏がお亡くなりになった。程遠い世界の方なのに知っている誰かを悼むような気持ちです。これは「おらほの美術館」の二科展で何年か続けて作品にお目にかかっていたからでしょう。私にとって二科は、鷹山宇一先生が所属していらした二科であり、企画展で眺める二科なのです。どこで見るよりも作品が自分に近付いてきてくれるような気のする美術館。それが「おらほの美術館」なのですね。絵を見るために身構えないでゆったりと過ごせる空間がある幸せ。この幸せをもっと大勢の方に味わって頂きたいものです。

絵に寄せて

小向　萩月

湯の宿や志功の裸婦は
寒からず

シャガールの二人漂う
銀河かな

白き馬天翔けにけり
秋信濃

華やかに千住の滝の
蠱けり

凍土に香月祈りし
未来あり

祖父 鳥谷幡山の思い出

在シアトル　野谷善達

平成3年に母が急に亡くなり、彼女の父である鳥谷幡山の作品が遺品として残された。私の母は父親の作品を他のどの作家の作品よりも愛し、ことある毎に少しずつ大切に彼の作品を集めていたことを知っていたので、この母の思いの込められた祖父の作品をどのように扱うか悩むことになった。遺族の間で適当に分けてしまおうかとも考えた。

しかし、そうすると多分、幡山を知る世代までは良いが、幡山の顔も見たこともない子供の代以降になると、作品がどのように扱われるか保証の限りではないだろうし、又、作品の四散は必定となろう。従って、何処かまとめて永く保存できるところはないかと考え、祖父の出身地である青森の美術館に寄贈したらどうかと考え、県の美術館を調べてみたが、当時青森には県立美術館はないとのことで大いに驚いた。私は当時神奈川県に住んでいたが、たまたま知人経由で十和田市の米田省三先生から「近々七戸町に美術館ができる！」との知らせが届いた。何たる偶然か！奇しくも七戸町は祖父の生まれ育った町（瑞龍寺の住職の子）であり、何か深い縁を感じた。更にその後、七戸町の役場から盛田正男、戸舘栄一両氏が作品の寄贈の依頼に遠路はるばるお見えになったり、また私が妻と七戸を訪問した折には、浜中達男先生、蔦温泉の小笠原耕四郎氏に暖かく迎えられ、七戸の方々の熱意にいたく感激した。七戸出身の画家の作品が生まれ故郷に帰る！これ以上の自然の成り行きがまたとあろうか。従って最終的に七戸の美術館に作品を寄贈することに決めた。

幡山の作品を七戸に送り出す前に、作品の展示会を思い立ち、野谷家の菩提寺である西光寺の住職の賛同を得て、同寺にて作品を一堂に展示して、多くの人に観ていただき、母の遺品とのお別れをした。以上が、鳥谷幡山の作品が七戸の鷹山宇一記念美術館に寄贈されるに至った経緯です。

次に、私の子供の時の記憶をたどり、祖父の思い出を述べさせていただきます。

芸術家のせいか風変わりな処があった。時折娘の嫁入り先である東京にあった我が家へ遊びに来たが、その時の出で立ちは、和服と足袋に何故か洋風の短靴を履き、洋傘をステッキ代わりにして現れるのが常であった。寒い時期には、更に川獺（かわうそ）の毛皮の襟巻きとソフト帽をかぶってやって来た。子供心にも普通ではないと感じた覚えがある。若い頃、本当は船乗りになって、世界を巡りたかったそうであるが、夢果たせず画家となり、自分の果たせなかった海外雄飛の夢を長男に託し、中学生であった彼を中国の青島、その後ジャワに送り、外国事情および外国語を学ばせた。しかし、業中途で病を得て帰国し、20歳の若さで早逝した。祖父の夢は再び果たされず、大層落胆していたと、後日母から聞かされた。

祖父は、大正時代に台湾、中国、朝鮮半島へ写生旅行に出掛け、彼の地の風物が十和田湖の風景と共に、その後の彼の画

の題材になった。又よく国内も旅して廻ったが、北国の生まれのせいか、暑さが苦手で夏になると北へ（東北地方）出掛け、画を描いては各地で展覧会を催し、雪が訪れる前に東京に舞い戻るのが常であった。まさに画家ならではの贅沢であろうか。

かれこれ40年前になるが私が中学生の時、ひと夏、祖父の北への旅のお供をしたことがある。山の中の一軒宿、蔦温泉に泊まり、付近の蔦沼、十和田湖を初めて訪れた。祖父は、若い頃から未だ無名であった十和田湖の紹介に努め、常日頃日本で一番素晴らしい所だとよく自慢していたが、十和田湖を実際に観て、その「神秘さ」に驚嘆したことを今でも思い出す。又、祖父は大変お酒が好きで、いつも実に美味しそうに飲んでいた。キリストが十和田湖地方に移り住んだとする説を信じて、自分でも研究をしていた関係で、酔うと時々「ゴルゴダの丘で処刑されたキリストは、実は身代わりで、本当のキリストは、十和田湖近在に移り住んだ」とか、だから「十和田湖」の語源は、「十（十字架）」と「和田（water＝水）であり、「キリストの湖」の意であるとか、学校では聞いたことのないような話を、まだ子供の私にも実に熱っぽく語ったものだった。

私にとって、祖父はドン・キホーテみたいな、いつまでも「見果てぬ夢」を追い続けた、そんな人でした。

いちボランティアとして思うこと

七戸町　福田　幸男

私の生まれ育った七戸町は、教育の町・文化の町といわれますが、今、県内に誇り得るものとしては、この鷹山宇一記念美術館が第一ではないかと思います。開館間もなくからこの美術館に長い間お世話になり、ボランティアをさせていただいておりますが、日頃思っている事の一旦を述べてみたいと思います。

今は、イベントのあるたび、「今回も都合のつく日にボランティアを」という要請に応じて参加している人が大部分と思われますが、折角美術館発展の趣旨に賛同して友の会々員になって居られるのですから、お金を出すだけの会員ではなく、イベントの開幕セレモニーのご案内を受けたら積極的に参加し、式典終了後に10分でも20分でも館長さんから「今回のイベントの狙い・見所・ボランティア上の留意点」等の質疑をした上で出番に備えるとか、もっと言えばボランティアの立場から、積極的に発展的な意見・アイデアをたくさん出して美術館運営上の参考にしていただくというような実動組織が出来て、美術館を良くする為にボランティアとして参加することが生きる喜びでもあるというようなことにでもなったらどんなに楽しいだろうなあと思います。開館10年、理事者・館長・職員の方々の日頃の行き届いた気配り、ご苦労に心からの謝意を表しつつ。

イタリア紀行

福田　露幸

古都ローマ雨雪をもて
歓迎す

創世の時空偲べと
しぐれ来し

蝶触れし斜塔倒るる
ことありや

廃墟とはかくも静かや
寒の石

車無き島の静けさ
銀河冴ゆ

10周年を迎えて

七戸町　盛田駿造

鷹山宇一記念美術館友の会は今年11月で10周年を迎えました。友の会設立の趣旨は鷹山宇一記念美術館の事業活動に協力すると共に、美術に関する知識と教養の向上を図ることにあります。現在の会員数は平成16年9月末現在、364名であります。会員の分布状況は地元七戸町は189名（51．9％）、七戸町を除いた青森県内は158名（43．4％）、県外は16名（4．4％）、アメリカ1名（0．3％）となっており、美術館を支える会員は県内各地はもとより全国から広く加入しております。

これまでの主な事業は、鷹山宇一先生の油彩画を美術館が購入する時の資金の一部として頂くため、友の会の剰余金を積み立てし、10年間で200万円を寄贈いたしました。美術館ではこの資金を購入資金の一部として、「湖畔の花」「森の馬」の2点を購入いたしました。（本号巻頭に掲載）

また、会報は平成7年1月発行を第1回として年4回発行し、今回の10周年記念号で第37号となりました。

研修旅行は、友の会設立後3ヶ月たった平成7年2月に第1回研修旅行として、「萬鉄五郎美術館」「宮沢賢治記念館」を訪問し、平成16年11月の「四川文明展」「竹久夢二展」で第21回を数えます。参加者は延べ538名。その中には第8回のスペイン・パリ美術紀行、第19回のイタリア・ルネッサンス美術紀行の海外研修旅行があります。

また、美術講演会は、美術館との共催を含め6回開催し、さらに、イタリア・ルネッサンス美術講座を青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク構想推進課（当時）のご協力を得て全6回を開催いたしました。その他ミュージアムコンサートを開催しております。

今、全国の美術館において、それぞれの美術館の独自の活動が求められており、それに伴って急激に変貌してきております。

鷹山宇一記念美術館も例外ではありません。幸いに当美術館は地域に密着し、独自の視点で活動しており、広く県内外の方々のご支援を得て、その評価も高まって来ております。

10周年を機に、今後の活動について、マンネリにならないように、美術館の活動を積極的に支援して参りたいと考えております。会員皆様のご意見を寄せて頂き、今後の活動を充実して参りたいと思います。

会員の皆様のさらなるご支援をよろしくお願いいたします。

（友の会事務局長）

鷹山宇一記念美術館
News & Report
2004年12月15日発行

遊蝶記から

12月10日は鷹山宇一生誕記念日

美術館では毎年12月10日、鷹山宇一の誕生日を記念して、生誕祭「遊蝶記」を開催しています。

5回目となる本年も終日無料開館し、初期から晩年までの油彩・木版画を展示したほか、「アトリエ」を再現するなど、鷹山芸術に親しんでいただくと共に、「遊蝶記の集い」を開催しました。

集いには友の会会員をはじめ関係者ら30名が一堂に会し、皆でハッピーバースデーの歌を唱い、バースデーケーキをいただきながら、この1年の出来事を振り返り、新年への抱負などを語り合いました。

終わりに、館長の鷹山からサミュエル・ウルマンの詩『青春』が紹介され、お開きとなりました。一部を抜粋してご紹介します。

新年が皆様にとりまして幸多き1年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

▶鷹山宇一ポートレートを囲んで皆で集合写真をとりました。

◀ハッピーバースデー宇一！とろうそくの火を吹き消し、96才を祝いました。

青春

青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

中略

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。（岡田義夫訳）

12月～3月までの休館日のお知らせ

●年末年始●
12月30日(木)～新年1月3日(月)
●館内整備のため●
1月31日（月）～2月10日(木)
●定休日●
毎週月曜日
（祝日は開館し翌日振替休館）

美術館日誌

【9月】

◇フォトしちのへの協力により国際写真サロン展示作業
鷹山館長・曽根原「子どもの文化」会議出席（1日）
◇「第64回国際写真サロン」初日／博物館実習武田廣之さん受入（2日）
◇国際写真サロン開催記念写真教室・モデル撮影会開催（4日）
◇青森市新城中学校2学年45名来館（8日）
◇鷹山館長「ワイルド・スミス展」テープカット出席（11日）
◇美術館アートクラブ「土を焼く」開催／（11・12日）
◇国際写真サロン最終日／七彩会油絵教室開催（12日）
◇展示替え作業のため臨時休館（13～17日）
◇火曜サロン開催（14日）
◇式典出席のため織田廣喜先生来館（17日）
◇「なんて素敵な織田廣喜展」「二科会青森支部展」初日・開催式（18日）
◇七戸町七戸小学校3学年来館（24日）
◇美術館アートクラブ「土を焼く」開催（25・26日）
◇七彩会油絵教室開催（26日）
◇鷹山館長青森県生涯学習審議会出席（27日）
◇山口県玖珂町議会議員来館（28日）
◇鷹山館長八戸市美術館市民大学講座で講演会（29日）
◇鷹山館長東北町学校保健研究会で講演会（30日）

【10月】

◇福岡県碓井町織田廣喜美術館有江学芸員来館（1日）
◇鷹山館長蝦名副知事挨拶モデル事業会議出席（8日）
◇鷹山賞児童作品展審査のため二科会会員・濱田進先生来館（9日）
◇濱田進先生によるワークショップ「大銀南木を描く」開催（10日）
◇七彩会油絵教室開催
鷹山館長・成田指定管理者制度説明会に出席（15日）
◇織田廣喜展最終日（17日）
◇展示替えのため臨時休館（19～22日）
◇鷹山館長モデル事業会議出席（22日）
◇美術館アートクラブ「不思議な生き物」開催（23日）
◇ワークショップ「はらぺこあおむしバスツアー」開催（24日）
◇美術館2階工房にて上十三教育委員長会議開催（28日）
◇七彩会油絵教室開催（29日）

【11月】

◇青森市景徳鎮バスツアー開催（2・3日）
◇鷹山館長八戸幼稚園協会講演会、及びホテル青森における四川文明展レセプションへ出席（5日）
◇鷹山館長五所川原市働く婦人の家講演会（6日）
◇鷹山館長三沢読書会で講演会（13日）
◇展示替え作業のため臨時休館（16～19日）
◇博物館実習橋本麻美さん受入／鷹山館長・曽根原「子どもの文化」会議出席（16日）
◇七彩会油絵教室開催（19日）
◇鷹山賞児童作品展表彰式開催（20日）
◇「第4回鷹山賞児童作品展」「第4回地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展」初日（21日）
◇七戸町城南小学校1学年43名来館（25日）
◇七戸町城南小学校2学年46名3学年41名来館（26日）
◇美術館アートクラブ「不思議な生き物」開催／鷹山館長青森ファンドプレゼンテーション出席（27日）
◇上北町小川原小学校2学年8名来館（30日）

埼玉県立博物館特別展「羽子板の美とわざ」開催のご案内

新春の風物詩である羽根つきの道具として用いられる羽子板は、歴史の中で単なる遊具から様々な意匠をこらした飾り羽子板へと発展し、各地で多彩な様式のものが製作されてきました。本展は、羽子板に因む歴史・考古・美術資料を加え、多角的な視点から羽子板の文化史を紹介しようというもので、見町観音堂所有の羽子板も出品されます。

●会期●
新年1月6日(木)～2月13日(日)
●定休日●
毎週月曜日
（祝日は開館し翌日振替休館）

特別展から

なんて素敵な織田廣喜展

～鷹山宇一と仲間たち Ⅱ～

併催／二科会青森支部展

9月18日(土)～10月17日(日)

▶織田廣喜氏。初日の18日は、開催式、ギャラリートーク、講演会と忙しい一日でした。「絵筆とリラと」と題した講演会では、40年以上連れ添い晩年寝たきりとなった奥様・リラさんとの思い出を交えながら、これまでの画業を振り返りました。

2002年の「東郷青児展」に続いて、鷹山宇一が影響され且つ影響を与えた美術家を紹介するシリーズの第2弾として開催。鷹山宇一と共に戦後の二科会の立役者となった画家・織田廣喜の自宅秘蔵作品を中心に展覧しました。30日間の会期中、2，535人もの多くの方々にご来館いただきました。

◀テープカット。右から当財団理事長青山浄晃、二科会青森支部長・安田勝子氏、青森放送代表取締役専務・葛西英二氏、織田廣喜先生、東奥日報社代表取締役社長・佐々木高雄氏、七戸町教育長・新谷勝弘氏、当美術館名誉館長・鷹山増子。

第4回鷹山賞児童作品展

11月21日(日)～12月19日(日)

第4回地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展

絵画コンテスト「鷹山賞展」へは、青森県南部地方の小・中学校、養護学校から587点もの応募があり、鷹山賞を頂点とする入賞24点、入選117点が選ばれました。

これら入賞・入選作品展と、世界各国の子どもたちによる地球環境をテーマにした作品展を同時開催し、会期中は大勢の家族連れで賑わいました。

▶10月9日(土)には、二科会会員で梅花学園女子高等学校教諭・濱田進先生を審査委員長に審査会が開催されました。

▶20日、入賞者授賞式と懇親会が行なわれました。また、併催の地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展を主催する(財)日本品質保証機構理事長・上田全宏様からご祝辞を賜りました。

◀鷹山賞「北の大地に根付く大木」千葉友瑛さん（三沢市立堀口中学校）第1回展以来久々に中学生の部から鷹山賞が選ばれました。

☺美術館アートクラブ☺

【担当／曽根原牧子】

二科会会員の濱田進先生を講師にお迎えした「大銀南木を描く」、この講座では樹齢800年の七戸の大銀南木をテーマにコラージュ作品の制作をしました。

重点は3つの「みる」。「見る」全体の形を感じる。「観る」様々な角度から、考えながら観察する。「視る」表面に見えない内側を透視する。

子どもたちは、樹の周囲を歩き、聴診器で幹の内部を流れる水の音を聴きました。そして、感じたことを一度言葉に置き換えてから、眼を閉じて心に留めている大銀南木に何度も向き合い、自分だけの樹を創りました。

先生が子どもたちに伝えたメッセージから一部ご紹介します。

『この「見る」だけではなく「観る・視る」を日常で意識的に行ってください。春夏秋冬、朝昼夕それぞれの違いに気付かされます。そのことを心に留めて、絵を描くときに静かに思い出すことが大切です。この3つの「みる」をたくさん行うとやがて創造する見方、考え方に繋がるのです。それが「芸術」なのです。』

講師：濱田進先生（洋画家・二科会会員、梅花学園女子高等学校教諭、日本放送協会学園講師）

聴診器をあて、耳を澄ますと幹を流れる水の音が聴こえました

ポスターで見る 10 年の歩み

平成８年　春季二科展

鷹山宇一　「高原の花」

平成６年　開館記念ポスター

鷹山宇一　「早春賦」

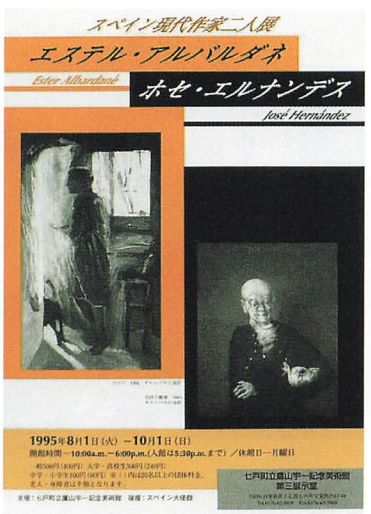
平成８年

平成７年　春季二科展

久保繁造　「十五夜」

平成８年

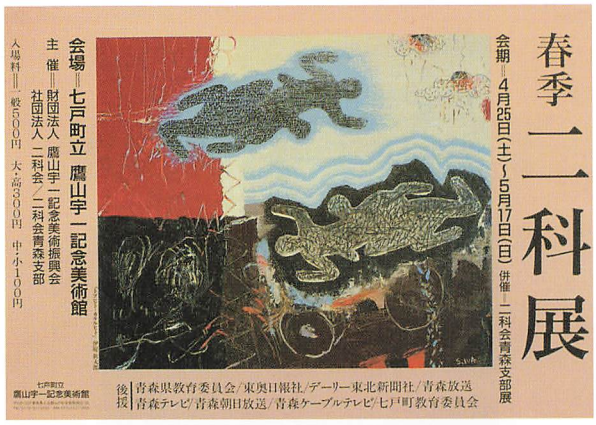
平成７年



「ひかり」

「崇拝の職務」

平成10年　春季二科展



伊庭新太郎　「トブヒト・カケルヒト」

平成９年

平成10年

平成９年　春季二科展

狩野　守　「デルフィの女」

平成10年

平成９年

鷹山宇一　「荒野の歌」

平成 11 年　春季二科展

「北海道の大地と自然」

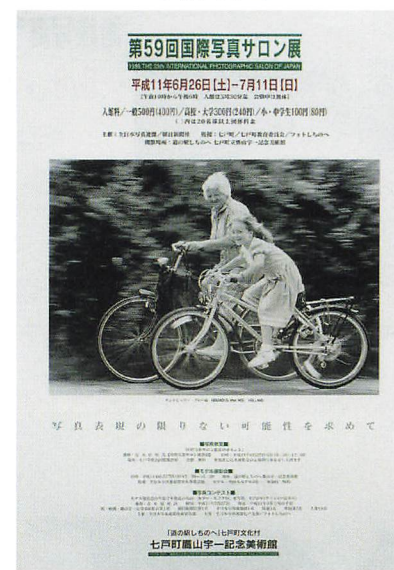
平成 11 年

「シエナの丘」

平成 12 年　春季二科展

赤羽恒男　「モン・サン・ミッシェル」

平成 11 年



平成 12 年

奈良美智

平成 11 年

鷹山宇一　「裸婦」（デッサン）

平成 13 年　春季二科展

日高正法　「満　月」

平成 12 年

平成 13 年

平成 12 年

平成 13 年

平成 12 年

平成 14 年　春季二科展

吉野　毅　「白い風景」

平成 13 年

平山郁夫　「西方浄土須弥山」

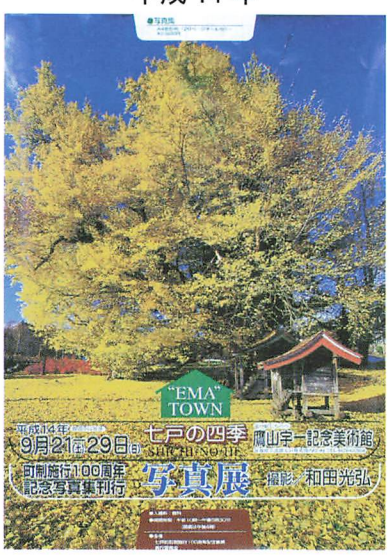
平成 14 年

「望　郷」

「四重奏」

平成 13 年

平成 14 年



和田光弘　「大銀南木」

平成 14 年

平成 15 年

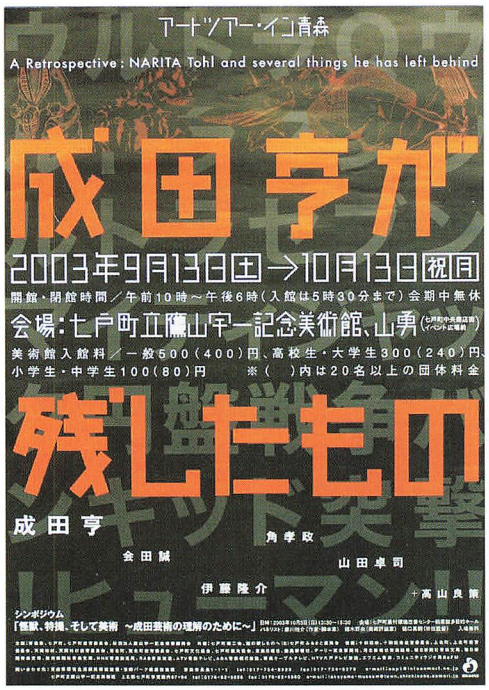
島田紘一呂（二科会）

平成 14 年

鳥谷幡山・上泉華陽・平野四郎・鷹山宇一

奈里多究星

平成 15 年



平成 14 年

平成 15 年

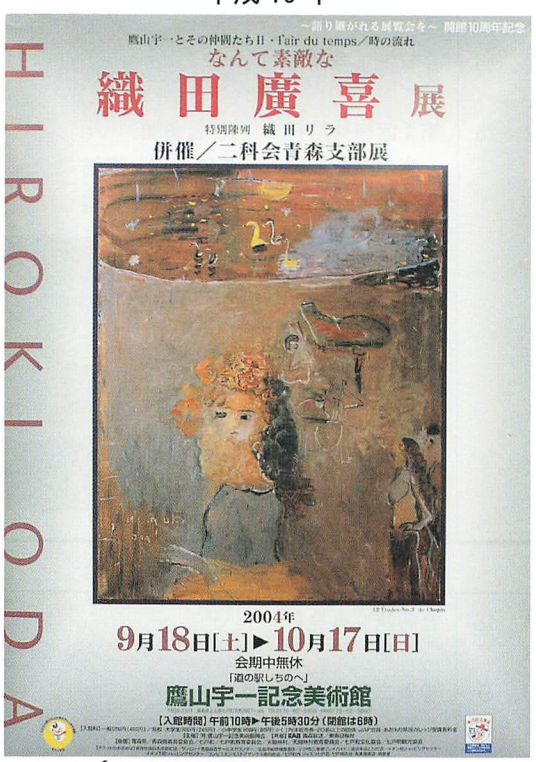
平成 15 年

西野嘉斎 「ワルツ」

平成 16 年

平成 15 年

平成 16 年



「Études — No.3 de Chopin」

平成 16 年

牧進「花逍遥」

平成 16 年

平成 16 年

鷹山宇一記念美術館・友の会　年譜

鷹山宇一記念美術館

平成６年度

6．4．1	財団法人鷹山宇一記念美術振興会　認可 理事長　福士孝衛（七戸町長）
4．27	文化村物産館（スペイン生活文化館）オープン
8．1	鷹山宇一記念美術館オープン 名誉館長　鷹山宇一 美術館長　小原恭平
8．1 ～ 10．2	文化村・鷹山宇一記念美術館開館記念展 「鷹山宇一・秋山庄太郎二人展」 開館記念コンサート　フルート演奏 鳥谷部良子
10．31	横浜美術館学芸部長　武田　厚氏来館
12．28	三陸はるか沖地震でランプに被害
7．1．3	開館累計入館者１万人達成
1．27	東　信昭先生　「デザイン画教室」（全８回）
3．4	美術講演会　「取材の中で見た美術館」 東奥日報社むつ支局長　榊　繁氏
3．17	美術講演会　「明山応義の世界」 画家　明山応義氏
3．24	美術講演会　「私の二科時代」 弘前大学教育学部教授　村上善男氏

平成７年度

7．4．11	第１回火曜サロン（以降毎月開催）
5．9 ～ 5．28	「春季二科展」（第１回） 吉井淳二　㈳二科会理事長来館
7．14	小原恭平館長逝去
8．1	文化村・鷹山宇一記念美術館グランドオープン スペイン民芸資料館開館 特別講演会「スペイン美術の潮流」 美術評論家　北川フラム氏
8．1 ～ 10．1	「スペイン現代作家二人展」 ～エステル・アルバルダネとホセ・エルナンデス～
11．1	佐藤亘氏　美術館長就任
8．2．18	美術講演会　「画人・十和田湖紹介の鳥谷播山」 地方史研究家　山崎栄作氏

鷹山宇一記念美術館友の会

平成６年度

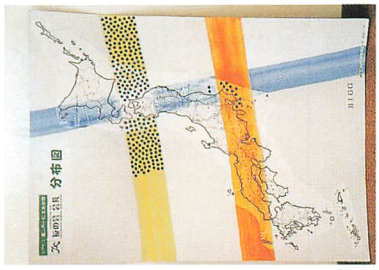
6．11．19	鷹山宇一記念美術館友の会設立総会 会場：七戸中央公民館　　会員 203 名で発足 会長　山本洋一

7．1．15	会報第１号発行
2．25	第１回研修旅行　　19 名参加 岩手県東和町　　萬鉄五郎美術館 岩手県花巻市　　宮沢賢治記念館

平成７年度

7．4．15	会報第２号発行
5．9 ～ 5．28	春季二科展監視ボランティア 以後、各展において監視ボランティア協力

7．2	萬鉄五郎美術館鉄人会と交流会 於：鷹山宇一記念美術館
7．15	会報第３号発行
8．1．15	会報第４号発行

8．3．10	美術講演会　「鷹山宇一先生との思い出」 版画家　佐藤米次郎氏	8．3．16	第２回研修旅行　　23名参加 北海道函館市　　北海道立函館美術館
平成８年度		**平成８年度**	
8．4．28 〜 6．2	「春季二科展・二科会青森支部展（第１回）」 鷹山宇一先生来館	8．4．15	会報第５号発行
5．12	茶道裏千家淡交会十和田青年部の方々による お呈茶（以後、毎年各展で開催）		
7．27 〜 8．25	特別企画展「馬を描いた郷土の画家たち」 第一部「久保田政子の世界展」		
8．1	美術館オープン記念無料入館日（以後毎年実施）		
8．27 〜 9．23	特別企画展「馬を描いた郷土の画家たち」 第二部「上泉華陽のうま展」	7．6	平成８年度通常総会
9．28 〜 11．24	秋山庄太郎特別展 「女たちと花信展」	7．15	会報第６号発行
9．30	写真家　秋山庄太郎氏に美術館顧問を委嘱		
10．6	美術講演会「女たちと花信展」によせて 写真家　秋山庄太郎氏	11．9	第３回研修旅行　　33名参加 岩手県雫石町　御所湖川村美術館 岩手県盛岡市　深沢紅子野の花美術館
12．15	国道４号添いに美術館の看板設置		
9．3．1	美術講演会「子ども美術館」 十和田市役所馬事公園課特別主幹　今純一郎氏		
3．9	美術講演会「陶磁器の基礎知識」 宮城県中新田町 東北陶磁文化館学芸員　小野裕子氏		
3．16	美術講演会「十和田湖と鳥谷幡山」 地方史研究家　山崎栄作氏		
3．21	ビデオ「鷹山宇一の世界」 一花と蝶そしてランプ一　完成	9．3．25	会報第７号発行
平成９年度		**平成９年度**	
9．4．26 〜 5．5	「第57回国際写真サロン」（第１回）		 友の会会員分布図ポスター
5．9	㈶鷹山宇一記念美術振興会　新理事長就任 新理事長　青山浄晃		

9．5．10	「春季二科展・二科会青森支部展」（～6.1）
6．10	「平成９年度県収集美術資料展」（～6.22）
6．23	学芸員資格実習受入（以後、随時受入）
6．29	入館者５万人達成
7．26 ～ 9．23	「開館３周年記念鷹山宇一の世界展 一心象，その原点一」 併催：「秋山庄太郎写真展」
9．3	「鷹山宇一画集」完成
9．27	「美術館コレクション・鳥谷幡山掛軸展」
11．13	佐藤亘館長辞任（七戸町教育長就任）
11．29	美術館ワークショップ「銅版画教室パートⅠ」 版画家　戸村茂樹氏（～11.30）
10．1．23	鷹山宇一先生「第26回デーリー東北賞」受賞
3．27	鷹山宇一作品「めざめ」購入

ボランティア懇親会

9．10．4	平成９年度通常総会 絵画購入基金積立開始
11．15	第４回研修旅行　22名参加 三沢市　寺山修司記念館、斗南藩記念観光村 八戸市　八戸市美術館「ピカソ展」

12．15	会報第８、９合併号発行
10．3．20	会報第10号発行

平成10年度

10．4．25 ～ 5．17	「春季二科展・二科会青森支部展」
6．13 ～ 7．5	「アントニオ・ガウディ展ｉｎ七戸」 （実行委員会形式）
6．17	「スペインの夕べ」スペイン大使館文化担当参事官 ヘラルド・ブガリョ・オットーネ氏来館
7．5	美術講演会「彫刻の話」 彫刻家・二科会会員　吉野毅氏
7．25 ～ 8．23	「第58回国際写真サロン」
7．25	美術講演会「国際写真サロンに見る現代写真 のながれ」 全日本写真連盟関東本部委員長 第58回国際写真サロン審査委員　日橋義雄氏

平成10年度

10．5．9 ～ 5．10	第５回研修旅行　16名参加 東京都多摩市　東京国際美術館 「鷹山宇一卒寿記念展」 東京都立川市　ファーレ立川

6．6	平成10年度通常総会
6．15	会報第11号発行
8．7	美術館コンサート 主催：七戸町文化協会　後援：友の会 グリーンファーム弦楽合奏団演奏会

10. 11. 28 〜 11. 29	美術館ワークショップ「銅版画教室パートⅡ」 版画家　戸村茂樹氏
12. 2	鷹山宇一先生「第５１回東奥賞特別賞」受賞
12. 25	財団理事　石田勲氏逝去
11. 1. 26	理事会において「海の誕生」購入決定
2. 1	鷹山ひばり氏美術館長就任
3.	春季二科展開催されず

10. 9. 15	会報第 12 号発行
9. 27	第６回研修旅行　　44 名参加 青森市　県立郷土館 「青森県近代日本画のあゆみ展」 弘前市　市立博物館「蔦谷龍岬と弟子たち」 弘前市　市立文学館 金木町　太宰治記念館・斜陽館

12. 15	会報第 13 号発行

平成 11 年度

4. 29 〜 5. 30	開館５周年記念 「世界遺産の文化遺跡を描く－平山郁夫展」
5. 9	広島県瀬戸田町立平山郁夫美術館 館長　平山吉男氏来館
6. 26 〜 7. 11	「第 59 回国際写真サロン」
6. 27	美術講演会「国際写真サロン鑑賞のポイント」 全日本写真連盟理事　岩永辰尾氏
7. 17 〜 9. 5	「開館５周年記念鷹山宇一の素描展」 （静謐のレゾン･デートル　幻のデッサンたち） 新収蔵品「海の誕生」、「めざめ」公開 「二科会青森支部展」併催
8. 13	美術館夜間開館（午後８時迄 13 日、14 日）
9. 11 〜 10. 11	「前田真三写真展・丘の四季」 〜北海道の大地と自然〜
10. 25	鷹山宇一先生、午後２時 13 分逝去
11. 20 〜 11. 28	「青森県／美術館コレクション展」 〜 1956 － 1965 日本美術の多様な展開〜
12. 10	七戸町名誉町民鷹山宇一先生の七戸町民葬 於：鷹山宇一記念美術館 以後、12 月 10 日を「遊蝶記」とする

平成 11 年度

11. 4. 15	会報第 14 号発行
6. 20	油絵教室開催　（全 10 回）　10 名参加 講師　小川敏雄先生 終了後「七彩会」として活動中 会員１６名

6. 5	平成 11 年度通常総会 第１回美術講演会開催「棟方志功の世界」 棟方志功記念館館長　福井平内氏

6. 15	会報第 15 号発行
7. 25	第７回研修旅行　　16 名参加 岩手県久慈市　久慈琥珀博物館 岩手県野田村　アジア民族造形館
8. 6	美術館コンサート 主催：七戸町文化協会　　後援：友の会 グリーンファーム弦楽合奏団演奏会
9. 15	会報第 16 号発行　友の会設立５周年記念号
10. 25	鷹山宇一先生逝去　会報臨時号発行
12. 15	会報第 17 号発行 鷹山宇一先生追悼号

12. 18 〜 12. 19	美術館ワークショップ「銅版画教室パートⅢ」 版画家　戸村茂樹氏
12. 1. 19 〜 1. 29	友の会設立５周年記念事業 第８回研修旅行　　11 日間　28 名参加 「スペイン･パリ美術紀行」 バルセロナ・マドリード パリ
3. 15	会報第 18 号発行

平成 12 年度

12. 4. 29 〜 5. 28	「春季二科展・二科会青森支部展」
5. 21	開館以来入館者累計　10 万人達成
7. 1 〜 7. 9	あおもりアートワンダーランド！ 「青森県／美術館コレクション展」 〜不思議な花園―奈良美智、橋本花を中心に〜
7. 20 〜 8. 31	「手塚治虫の世界展」 〜世代を超えた夢ワールド〜
9. 29	美術講演会「椿絵名品展」 高崎タワー美術館長　細野正信氏
9. 30 〜 10. 29	「椿絵名品展－北限の椿・あおもり」
11. 18 〜 12. 3	「第 60 回国際写真サロン」
11. 19	美術講演会「水の表現の仕方」 全日本写真連盟総本部事務局長　木村恵一氏
12. 10	第１回「遊蝶記」　アトリエ再現 鷹山宇一先生の誕生日に因み催す

平成 12 年度

12. 5. 14	第９回研修旅行　　12 名参加 仙台市　宮城県美術館「東北の画家たち」 佐藤忠良記念館 東北福祉大学芹沢珪介美術工芸館
6. 3	平成 12 年度通常総会 友の会設立 10 周年記念事業積立金開始 第２回美術講演会開催 「私が出会ったアーチストたち」 東奥日報社　社長　佐々木高雄氏
6. 15	会報第 19 号発行
8. 20	第 10 回研修旅行　　23 名参加 青森市 青森市産業会館「秦の始皇帝と兵馬俑展」
8. 26	ワークショップ「紅型染め」（〜8. 27） 側見沙と子先生
9. 15	会報第 20 号発行
10. 1	第 11 回研修旅行　　17 名参加 青森市　県立郷土館「大地の画家･常田健展」 青森市　棟方志功記念館
12. 15	会報第 21 号発行 七戸町名誉町民槇哲夫先生より寄稿
13. 3. 15	会報第 22 号発行

平成 13 年度

13. 4. 28 〜 6. 3	「春季二科展・二科会青森支部展」
6. 6 〜 6. 17	「第 61 回国際写真サロン」

平成 13 年度

13. 6. 2	平成 13 年度通常総会 鷹山画伯の絵画購入資金として積立金 100 万円を㈶鷹山宇一記念美術振興会へ寄付 第３回美術講演会開催「父、鷹山宇一を語る」 館長　鷹山ひばり氏

13. 6. 17	美術講演会 「ヤマちゃんのワンポイントレッスン」 全日本写真連盟関東本部委員　山村行志氏
7. 19	美術講演会「藤子先生の思い出」 小学館児童・学習局 チーフプロデューサー　平山　隆氏
7. 20 〜 9. 2	「夢は無限　藤子・F・不二雄の世界展」
8. 18	開館以来入館者数累計　15万人達成
9. 29 〜 10. 28	薬師寺玄奘三蔵院大唐西域壁画完成記念 「平山郁夫ー大下図・スケッチ帖・素描画・資料展」 平山吉男　平山郁夫美術館館長来館 松久保秀胤 薬師寺管主来館、講話（美術館）
10. 21	美術講演会 「玄奘三蔵法師と平山郁夫画伯大壁画」 松久保秀胤　薬師寺管主　於：柏葉舘
11. 3	七戸町より第1回「しちのへ活性化大賞」受賞
11. 23 〜 12. 16	「第1回鷹山賞児童作品展・ＪＱＡ第1回 地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展」
12. 10	第2回「遊蝶記」

13. 6. 20	会報第23号発行
6. 30	美術館コンサート 主催：アニマシオン七戸　後援：友の会 「デュオ・ノルテコンサート」 ギター佐藤俊＆フルート松尾光穂子
7. 15	第12回研修旅行　18名参加 青森県三厩村　津軽海峡三厩美術館
9. 15	会報第24号発行
9. 15	第13回研修旅行　25名参加 青森市　青森市文化会館 「シャガールのアレコ」観賞とシンポジウム 青森県立郷土館　「西洋名画への招待」
10. 4	八戸市美術館ボランティア研修会来館 友の会役員等と交流
10. 27	第14回研修旅行　25名参加 岩手県盛岡市　岩手県立美術館 「メルツバッハー・コレクション展」
12. 15	会報第25号発行
14. 3. 15	会報第26号発行

平成14年度

14. 4. 12 〜 4. 21	「第62回国際写真サロン展」
4. 14	写真教室 全日本写真連盟関東本部委員　山村行志氏
4. 27 〜 5. 26	「春季二科展・二科会青森支部展」

平成14年度

14. 5. 19	第15回研修旅行　31名参加 青森市　県立郷土館「松木満史展」 五所川原市　アルテシオン「工藤哲巳展」
6. 7	平成14年度通常総会

14. 6. 9	俳優　林　隆三氏特別公演「賢治童話の世界」
6. 9	第１回子どものための「ワークショップ」開催 以降、年数回開催
7. 20 〜 9. 16	七戸町制施行 100 周年記念 鷹山宇一とその仲間たち展Ⅰ「東郷青児展」
9. 21 〜 9. 26	七戸町制施行 100 周年記念写真集刊行記念 「七戸の四季〜写真展」 撮影：和田光弘氏
10. 12 〜 11. 4	七戸町制施行 100 周年記念・郷土の作家たち展 「鷹山宇一、鳥谷幡山、平野四郎、上泉華陽、 奈里多究星」
11. 2	開館以来入館者累計　20 万人達成
11. 23 〜 12. 15	「第２回鷹山賞児童作品展・ＪＱＡ第２回 地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展」
12. 10	第３回「遊蝶記」 記念講演会「鷹山宇一の世界」 青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク 構想推進室学芸主査　　工藤　健志氏
15. 1. 16	美術館顧問　写真家秋山庄太郎氏逝去

14. 6. 15	会報第 27 号発行
7. 13	美術館コンサート 主催：アニマシオン七戸　後援：友の会 「デュオ・ノルテコンサート」 ギター佐藤俊＆フルート松尾光穂子
7. 18	第４回美術講演会開催（美術館と共催） 「近現代美術史の中の二科会ー東郷青児と 鷹山宇一を中心にして」 青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク 構想推進室学芸主査　　工藤健志氏
9. 15	会報第 28 号発行
9. 29	第 16 回研修旅行　　33 名参加 弘前市　吉井酒造煉瓦倉庫「奈良美智展」 弘前市　市立博物館 「ミレーとバルビゾン派の作家たち」 青森市　青森県立郷土館 「大本山相国寺・金閣、銀閣秘宝展」
10. 7	美術館コンサート 主催：サロンミュージックソサエティ 後援：友の会 「大萩康司ギター・リサイタル」
12. 15	会報第 29 号発行
15. 3. 15	会報第 30 号発行

平成 15 年度

15. 4. 23	八戸ガス（株）会長　鈴木継男氏 鷹山宇一油彩画２点を七戸町に寄贈
4. 25	二科会理事　西野嘉斎氏に美術館顧問を委嘱
15. 4. 26 〜 6. 1	「春季二科展・二科会青森支部展」 ▶
7. 19 〜 9. 7	「木で作ろう！造形の森展」 「僕から君たちへ　島田紘一呂展」

平成 15 年度

15. 5. 17	イタリア･ルネッサンス美術講座　46 名参加 第１回「アッシジとピサ：中世美術の楽しみ」 青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク 構想推進課学芸員　　高橋しげみ氏
6. 7	平成 15 年度通常総会 10 周年記念事業　美術館に画集贈呈 講談社版「世界の美術館」全巻
6. 15	会報第 31 号発行
6. 21	イタリア･ルネッサンス美術講座　35 名参加 第２回「フィレンツェ：ルネッサンス美術の楽しみ」 青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク 構想推進課総括学芸主幹　　三好徹氏
7. 5	イタリア･ルネッサンス美術講座　38 名参加 第３回「レオナルド・ダ・ヴィンチとミラノ」 青森県環境生活部 美術館整備推進監　　黒岩恭介氏

15. 9. 13
〜
10. 13
アートツアー・イン青森（青森県と共催）
「成田亨が残したもの」展 美術館＆「山勇」
山田卓司、角孝政、伊藤隆介、会田誠

9. 13
イベント広場でカレーパーティー開催

10. 5
成田亨展記念シンポジウム開催（於：柏葉舘）
「怪獣、特撮、そして美術
〜成田芸術の理解のために〜」
パネリスト　藤川桂介　椹木野衣　樋口真嗣

10. 18
〜
11. 3
「第63回国際写真サロン展」
写真教室
全日本写真連盟理事　岡本美知子氏

11. 22
〜
12. 14
「第3回鷹山賞児童作品展・ＪＱＡ第3回
地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展」

12. 10
第4回「遊蝶記」

15. 8. 10
第17回研修旅行　23名参加
青森市　青森県立郷土館
「生誕100周年記念展
棟方志功〜わだばゴッホになる」
青森市　棟方志功記念館
青森市　「ナンシー関展」

8. 23
イタリア·ルネッサンス美術講座　25名参加
第4回「ローマ：バロック美術の楽しみ」
青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク
構想推進課総括学芸主査　池田　亨氏

9. 15
会報第32号発行

9. 20
イタリア·ルネッサンス美術講座　24名参加
第5回「ヴェネチアとヴェローナの美術」
青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク
構想推進課総括学芸主査　池田　亨氏

9. 28
第18回研修旅行　31名参加
弘前市　県立武道館「第34回日展巡回展」
弘前市　市立博物館
「京都国立近代美術館所蔵 日本画名品展」

10. 18
イタリア·ルネッサンス美術講座　26名参加
第6回「イタリア映画の楽しみ」
青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク
構想推進課総括学芸主査　立木祥一郎氏

12. 15
会報第33号発行

16. 1. 20
〜
1. 30
友の会設立10周年記念事業
第19回研修旅行「イタリア・ルネッサンス
美術紀行」　11日間　26名参加
フィレンツェ、ローマ、ヴェネチア、ミラノ

3. 15
会報第34号発行

	平成16年度
16. 4. 24 〜 5. 30	語り継がれる展覧会を　開館10周年記念 「〜春光うらら〜さくら・桜展」 箱根・芦ノ湖　成川美術館コレクション
7. 17 〜 8. 21	語り継がれる展覧会を　開館10周年記念 「星野富弘　花の詩画展」 〜生かされている喜びと感謝〜
9. 2 〜 9. 12	「第64回国際写真サロン展」
9. 4	写真教室 全日本写真連盟関東本部委員　小野崎徹氏
9. 18 〜 10. 17	語り継がれる展覧会を　開館10周年記念 鷹山宇一とその仲間たちⅡ l'air du temps ／時の流れ「織田廣喜展」 併催「二科会青森支部展」
9. 18	美術講演会「絵筆とリラと」 ㈳二科会常務理事　織田廣喜先生
11. 21 〜 12. 19	「第4回鷹山賞児童作品展・ＪＱＡ第4回 地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展」
12. 10	第5回「遊蝶記」

	平成16年度
16. 6. 6	平成16年度通常総会 10周年記念事業絵画購入資金贈呈100万円
6. 6	第5回美術講演会開催　　29名参加 演題「レモンの画家　小舘善四郎」 青森県立郷土館学芸主幹　對島恵美子氏
6. 13	第20回研修旅行　　38名参加 五所川原市　「立佞武多の館」 五所川原市　「アートギャラリー縄文」 弘前市立博物館「柳宗悦の民芸と巨匠達展」
6. 15	会報第35号発行
9. 15	会報第36号発行
11. 23	第21回研修旅行　　35名参加 青森市　青森産業会館 「よみがえる四川文明〜 三星堆と金沙遺跡の秘宝展」 青森市　市民美術展示館 「生誕120年記念 竹久夢二展 / 関野準一郎展」
12. 15	会報第37号　友の会創立10周年記念号発行

父 鷹山宇一を語る

平成13年6月2日友の会主催の美術講演会において、鷹山ひばり館長から、ご自身の記憶や調査をもとに鷹山家のルーツまで遡り、宇一先生の生い立ちについて語ってくださいました。講演内容については、第一部として会報第24号から第26号まで連載しました。

本記念号では、ランプの蒐集逸話や宇一先生の子育て観など貴重なエピソードを第二部として書き下ろして頂き、第一部の再録に加えて、画家として父としての鷹山宇一が語られます。

鷹山　ひばり

【第一部】

鷹山家のルーツ

いつ鷹山が七戸にやってきたのかを調べました。

七戸町史によりますと、七戸隼人正信の採用した家臣、給人名に、享保14年小山田利右衛門、弟、鷹山立憲が【七戸御役医三人扶持】と書かれ、又、鷹山立益、一八石【七戸御給人身帯書上帳写】と記されています。その後、天間林村史に、上北郡、郡役所の移転問題で七戸側と野辺地、三本木同盟との間に乱闘事件があり、この事件の詳細は鷹山雅益の「七戸近代史」に譲る、と書かれ、ここにも鷹山の名が出てきます。そして、明治九年「天間舘外六ヶ村戸長役場」が設けられ戸長として鷹山宇太郎が就任しています。天間林村最初の村長、鷹山宇太郎は父の祖父であります。

宇太郎は鷹山の養子で妻「すま」が鷹山家の長女であり弟と妹がいました。この妹が七戸の盛田旅館のキク伯母さんの祖母となっています。鷹山家は子供に恵まれず、直系だけで細々と血を継いできたため一家族でも多く鷹山姓を守るため長女すまに養子を迎えました。

すまは、この、現十和田市の滝沢家からやってきた宇太郎との間に6人の子供をもうけました。お役医の家に養子に来た宇太郎は男子全員を東京の医専に、女子も専門学校に行かせましたが皆、20代の若さで早死にしました。そこで宇太郎は甥を、すまは姪を連れて夫婦縁組をして長男「宇一」が生まれました。父宇一が生まれた時、宇太郎、すまは狂喜し、特にすまは鷹山の嫡孫となった父に「かまどの灰までお前のものだ」と言い続け、父を溺愛しました。このすまが逝去した時、父はすまと同じ布団に入り、冷たくなった祖母の体をさすりながら一晩中、ただ泣き続けていたと後年私に話をしておりました。

哀囚先生と父

父は小学生の頃、「雪が降ると使用人が背負って学校まで連れて行ってくれた」とよく申しておりました。この時、一級上の槇哲夫博士や藤島均先生達と共に青山哀囚先生の教え子となりました。青山哀囚先生は当財団の青山浄晃理事長の岳父で、代用教員として七戸尋常小学校に奉職されていました。青山先生は当時大人気だった、鈴木三重吉の「赤い鳥」を、わざわざ東京から取り寄せをし子供たちに読み聞かせていました。多感な少年達は食い入るように聞き入っていたそうです。

私は三姉妹ですが、「ひばり、ちどり、くるみ」の名はこの「赤い鳥」から父がつけたものです。「ひばり」は上げひばりの如く、大空に向かって真っ直ぐに進むようにと願い「赤い鳥」に載っていた、土井晩翠の「ひばり」の詩から、「ちどり」は啄木の「きらきらと氷り輝くちどり鳴く」、「くるみ」は三重吉の「くるみ」の詩から、それぞれとりました。

今でも「ひばり」の名前は滅多にありませんが、通学定期券を買いに行くと、芸名ではなく、本名を書くようにと、よく注意されました。私たち三姉妹の存在が周知されると、妹が先に定期券を買い求めたとか、ちどりちゃんがまだ来ていないとか、窓口係と仲良くなって情報提供を受けるまでになりました。

棟方志功と父

父は、大正11年に旧制青森中学に入学しました。馬車に乗って七戸を離れる日に、親族や小作の人たちが手に手に日の丸の小旗を持って盛大に見送りをしてくれ、身が引き締まる思いで青森に向かったと話をしていました。青中時代に棟方志功、松木満史らに出会い、父の画家としての歩みが始まります。

父が青森中学に入学して間もない頃、学校の傍らの合浦公園で一人の異様な若者を見かけ、大変興味を覚えたと申しておりました。

その人が古手のフロックコートを着て、手に画架と絵具箱を下げ歩いてくると、待ちかまえていた子供たちが集まり若者を取り囲むそうです。写生が始まるとテレピン油につけた絵筆を、キャンバスと共に洋服の袖や胴に擦りつけては拭うので、キャンバスの上に絵具が盛り上がるにつれて、彼の着ているフロックコートも色とりどりの絵具だらけとなります。まわりを囲んでいた子供たちは大喜びで騒ぎ始めると、彼は大声で「有難うございました」と叫び、帽子をとり深々と丁寧に一礼して公園から立ち去るので、父は暫くの間、呆然としてその後姿を見送っていたと申しておりました。

旧青中時代
（中央が鷹山先生）

この棟方志功と出会ったことは、父の画業人生の大きな出発点でありました。

志功と共に、松木満史らが結成していた青光画社に父は加わり、切磋琢磨をして互いに学びの場としていきました。後年、志功と父が一緒になると、「松木はアホで俺たち二人は天才だ」と言い、松木と父、志功と松木が一緒になると、いない者の悪口を散々言うのが当たり前になったため、二人に会う時は、どんなに具合が悪くとも、父は必死で出かけたと言っていました。恐れを知らない、ただ一筋に信じてきた道を駆け巡っている若者たちの熱情が、痛い程伝わってくる話で、私は大変面白く聞いておりました。

仲間たち

絵描きの道を歩む決意をした父は、旧制青森中学校を卒業すると同時に上京いたしました。寄宿先は、阿佐ヶ谷で郵便局長をしていた父方の伯父宅でした。結婚が決まって挨拶に行った母は、今でもその家をよく覚えていると言っています。

しばらくして東京での生活に慣れた父は、その伯父宅を離れて下宿をしました。

その下宿先で一緒になったのが会津出身の版画家斎藤清でした。父はその頃まだ版画をやっており、斎藤先生は「天才に出会ったかと思った」と父を評して下さいました。父は、何枚も摺れる版画は芸術品としての価値がないと云って、満足できた一枚を残して原板を割っていたそうです。先生は「天才は何と勿体ないことを平気で行うのか」と、とても惜しんだとの事でした。

又、戦時中には、父が無雑作に放っておいた作品をもらい受け、会津のご実家に疎開させてくれていました。鎌倉の家を離れる時、「鷹山から預かった作品だから」と私に持ってきて下さいました。限られた量しか送り届けることが出来なかった時代に、父の才能を認めてくれたこの孤高の版画家は、それは見事な程に完璧に保存をして、半世紀後にこの美術館に飾る作品を残しておいてくれました。

体の弱かったお嬢さんをもった斎藤先生の姿を見て、家族を持つ大変さを悟った父は、それから長い間結婚することに躊躇したと言っておりました。

又、斎藤義重、桂ユキとの出会いもその頃でした。

斎藤義重先生は、亡くなった友人の奥さんと新宿のアパートに住んでいて、戦時中食料が全くなくなった時「鷹山が郷里からご馳走を持って帰ってきた」との話を聞き、勇んで仲間と出かけたそうです。父の部屋に入ったら、ご馳走はご馳走でも、何本もの酒瓶を前に父が得意満面の顔で皆を迎えたので気がぬけたと話されました。さすが、大酒飲みの面々も米のエキスではなく、やはり噛みごたえのある粒の方を食べたかったと、心の中で皆思ったそうです。

東郷青児氏らと（左から２人目が鷹山先生）

父は夜店で買った天狗の面を守り神としていました。

ある日、遊びに来た桂ユキ先生が賽銭を置いて拝んだところ、次の日大作が突然売れたと大喜びで御礼にこられました。その話を聞いて同じように賽銭を置いていった、角浩先生や松島正幸先生には、何のご利益もなかったと父が申しておりました。その天狗様は、父が毎朝、塩、米、水、酒を取替えて、夜には酒の肴を上げて大切にお守りをしていましたが、父が、遠く旅立った時から形相が変わりはじめ、今では封印をして静かに我が家を見守っております。

私が小学生の頃、大酒飲みだった父の元には、いつも客人が絶えませんでした。

秋山庄太郎、林忠彦、大竹省二など二科会写真部の会員や、土門拳先生などとお会いしていました。

当館の顧問である秋山庄太郎先生が、帰り際酔っぱらって家の木戸に用をたされました。元気だった曽祖母が怒って二階の窓からバケツの水をかけ大声で叱り飛ばしました。それから秋山先生は、我が家でお酒を召し上がることはありませんでした。

余談になりますが、銀座「ルパン」での太宰治の写真作品で有名な林忠彦先生は、それはステキな方でした。憂いをおびた後姿は、男のロマンや人生を感じさせ私は夢中になりました。一人暮らしの林先生と何とかならないかと秋山先生に相談したところ「林は昔世話になった歳上の女性の面倒を今見ているから、あきらめた方がいい」と面白くなさそうに、冷たく言い放しました。アキラメのつかない私は、直接林先生にお願いにいきましたが、「残り時間の少ない男よりも、長く幸せにしてくれる人を見つけなさい」と、あっさりと断られてしまいました。

もし、あの時林夫人になっていれば、今七戸にはいなかっただろうと運命の分かれ道を不思議に思います。

父は、大沢昌助先生とは教科書の挿絵のアルバイトを一緒にしていました。

大沢先生は、国語、社会、音楽と比較的挿絵の楽な教科をとり、父には理科や算数がまわってきたそうです。

理科の昆虫を描く時は、図録でも間違いがあるので、本物を探して丁重に描いたと言っていました。「精密、緻密な仕事を若い時にやっていたお陰で、歳をとってからでもきちんと蝶が描ける。大沢昌助は恩人だ」と、嫌みたっぷりに言って笑う父の顔を見ながら、大沢先生の目や鼻や口がない、あののっぺら坊の少女像が重なってきて困りました。

東京で生活していた父は、文京区白山上にある潮泉寺の方丈様と懇意にしておりました。この方丈様は文学や芸術を志していた若者を可愛がり、行き場のない芸術家の卵たちの面倒をみておられました。

その中には、直木賞作家になった寺内大吉先生や、西武オーナーであった堤清二氏らがいました。

文学青年で一番歳下の堤清二氏は、気の毒なことに先輩たちの使い走りをしたり、寺の雑用をいつも言い付かっていました。それでも毎日のように、文学に芸

術にお互いの持論をぶつけ合って熱き日々を過ごしながら、己自身を成長させていたのでしょうか。

絵描きになった父の地塗りには、このような刻があったからこそ、淡い詩的作品が描けたのだと、方丈様の存在を忘れてはならないと思っております。

結婚、そして家族

その方丈様が仲人となって近所に住んでいた母が嫁ぎました。

母方の祖父母が、芸術についてどのくらい理解あったかわかりませんが、大切な一人娘を嫁がせ、父を「先生」と呼び大事にしておりました。特に母の兄弟は父に一目も二目も置き、秋になると二科展に出品する作品を誇らしげにリヤカーに乗せて、本郷の家から上野の美術館に運んでいました。

上野に持っていく前に、出来上がったばかりの作品を、家族、親類、近所の人々が囲んで、父が、「恥ずかしくなる」と頭をかかえるほど称賛しておりました。子供心にも、父は大変立派な人なのだと尊敬していましたが、母の家族がこぞって父を敬愛し大切にしていたからだと、今でもその時の情景が目に浮かびます。母のすぐ下の叔父は、戦後父に出ていた外食切符で雑炊を食べて早稲田に通いました。「食べ盛りの者が食わなくてどうする」と言って外食切符を渡した父から、「物がない時代の情の深さを教えてもらった」と叔父はよく話をしてくれました。

私が物心ついた頃には、母方の祖父母、曽祖母、三人の伯叔父たちと私共家族五人の大所帯で生活していました。一人娘だった母は、詩歌や美術を愛する文学少女でしたが、使用人が何人もいたため、家事が何一つ出来ませんでした。

鎌倉文士の訳有りの家で新婚生活を始めた父は、米を研ぐすべさえ知らない十六歳下の新妻に音を上げ、三日で母の実家に逃げ込みました。若さと美貌に眼が眩んだ父は、代償としてその後の人生に気の毒なくらい大きな負い目を背負うはめになりました。

新婚時代の鷹山先生ご夫妻

私が小学生の頃、祖父母一家が文京区根津に移り住み、私共家族だけになり、朝から何もしない母に代わって父が朝食の仕度をしていました。

毎朝、台所から味噌汁の匂いと共に「♪船頭さんは今年六十のお祖父さん……ソレエッチラコッチラエッチラコー」と父が唄う歌が流れてくると、私共三姉妹は、寝床から起き出しました。

父は、冬の寒い日には、炬燵の中に洋服を暖めておいてくれ、私達娘三人は布団から出るとすぐ炬燵にもぐり込みました。毎朝新しい下着も用意されていて、汚れ物も父が洗濯していました。小さい頃から不思議に思っていたのは、我が家には何でも一番最初に電化製品が入っていたことでした。今考えてみれば、父が自分で使うために、掃除機も洗濯機も電気釜も買い求めていたとわかり可笑しくなります。

家族と父

家事は、男親の仕事と思い込んでいた私達は、父の日の作文に炊事、洗濯をしている父の姿を書いていました。血液型がA型の几帳面な父は、埃が絵につくと云って毎朝きちんと拭き掃除をしていました。整理整頓ができている小綺麗な父のアトリエには、鋏や糊が所定の位置にいつもおさまっており、すぐに借りることができました。必要な物がすぐに見つかる父のアトリエは、私達三姉妹の家づくりの原点になりました。

私が五年生の時に隣家のアパートから失火がありました。夕方母が買い物に出かけていて、家には妹たちと私の三人だけしかいませんでした。家の回りが騒がしくなり火事だとわかると、妹たちにランドセルを背負わせ、貴重品が入っている母のバッグを片手に玄関に佇んでいました。そこに血相をかえた父が帰ってきたので安堵しましたが、父は娘たちを残し自分の洋服だけをもって早々と避難してしまいました。入れかわりに買い物カゴを途中で放り投げて走って帰ってきた母は、無事な私達をみて泣きながら外に連れ出して抱きしめてくれました。

男親と女親の違いがはっきりとわかった事件でした。

それでも父は学校が休みに入るとよくディズニーの映画を見せてくれました。今から四十年以上も前の映画は、まだモノクロのものも多く、ディズニー映画の総天然色は夢を見ているような美しさでした。「白雪姫」「バンビ」「101匹ワンちゃん」「ミッキーの魔法使い」などを見た帰りに、上野の「精養軒」や本郷の「白十字」でフランス料理を食べる、楽しく嬉しい一日をつくってくれました。

東京タワーに初めて登った時は、高所恐怖症の父はまっ青な顔をして座り込んでしまい、ソファーまで皆で運びましたが、今度は横に置いてある《水槽が揺れている》と言って気を失いそうになりました。地下の食堂でビールを飲んでやっと正気にもどった父は、もう二度と東京タワーにはこないと断言しました。

私の家は、今はもうとっくになくなった都電の「本郷肴町」と「白山上」のすぐそばにあり、父はよくその都電に乗って後楽園競輪に行っていました。若いときから賭け麻雀や賭け将棋が好きだった父は、競輪の開催日が近づくとソワソワして予想紙を買い求め研究をしていました。

競輪、競馬、オートレースで勝つと、池袋の「西武」や、今はもうなくなった「丸物」にいって「台所用品」や、「夕食用の肉」を買って帰って来ます。デパートで雑貨や地下の食料品を見て廻る姿を思い浮かべると、何とも言えずおかしくなりますが、そんな家庭的な父が懐かしく、今、思い出しても幸せだった日々ばかりです。

美濃部都知事になってから都営ギャンブルが廃止され、後楽園で競輪が開催されることがなくなり、東京ドームに姿が変わりました。

父もアキラメがついたのではないかと思います。

本郷肴町（さかなまち）

「本郷も『かねやす』までは江戸の内」と川柳にうたわれたように私共が住んでいた「肴町」は下町の匂いのするところでした。

本郷通りを挟んだ向こう

側には落語家の円生師匠が住んでいました。当時内風呂がある家は稀で、大方の人々は、仕事が済むと銭湯につかってその日の疲れをとっていました。昼すぎの三時頃になると、年寄りや子供、早朝から仕事をしていた職人達が手ぬぐいに石けんを裸のまま包んで、銭湯の暖簾をくぐります。背中に見事な「昇り龍」の刺青をしている大工の棟梁や、「こぼれ松葉も二人連れ」と、左腕の真っ白なやわ肌に彫りものをしていた芸者の姉さんによく会いました。

その早い時間帯に円生師匠の弟子たちが銭湯客相手に落語の稽古をはじめます。

夏は涼しい脱衣場で、冬は洗い場の真中で「一席つまらない話を―」と始めると、「声が小さい」「訛るな」と客たちが叱咤をしますが、帰りがけに「アンちゃん頑張れよ」と言っていくらかの煙草銭を渡して激励していました。

父に連れられて男湯に入りこの様な光景をいつも見ていました。市井の文化がどのように育ち守られていくのかを、父は噛み砕いた言葉で教えてくれ、人情の機微にふれる寄席好きのきっかけをつくってくれました。

小股の切れ上がった「姉さん」たちが沢山住んでいた仕舞屋（しもたや）の前を通ると三味線の音が聞こえ、夜には新内流しがやってくる東京の古き良き時代のころでした。

昭和28年頃の鷹山先生とひばり館長

【第二部】

立川の家と父

原因不明の眩暈（めまい）で仕事ができなくなった父が、「西の方角に住所を移すと吉」と言われ東京の都下立川市に引越をしたのは、昭和42年の暮れのことでした。

生まれ育った東京下町「本郷肴町」から郊外の3DK団地生活は全く初めての事ばかりで慣れるまで随分と戸惑い時間がかかりました。

お風呂もその一つでそれまでの銭湯通いと違い、小さな浴室での入浴は窮屈でしたが、好きな時いつでも入れる嬉しさがあり、父はよく朝からお風呂に入っていました。当時「猫も杓子」も見ていたドリフターズを父は「下品な番組」だと言って嫌っていましたが、朝風呂に入った父は、よほど気持がよかったのでしょうか、例の「―いい湯だナァー―」の鼻唄が風呂場から聞こえて来て可笑しくなりました。

立川へ移ってからしばらくすると第1次絵画ブームが起こり、毎日4、5組の来客がありました。父も母も、朝から食事をする時間もなく画商との応対に追われ父は仕事もできない状態でした。父の仕事は、作品の大きさに関係なく、絵の具が乾く時間が必要なため、年間100点前後しか制作できません。限られた作品は、若い時から付き合っていた画商に先ずお渡しをし、デパートの画商部には年間1枚だけおわけしていましたが、それぞれ本・支店から見えていましたので、30枚位はなくなっていました。新規の画商には全くお渡しする余分はありませんでしたが、それでも毎日毎日玄関前に並んで順番を待ってくださいました。無下にお断りできなかった父は、「会うと断れないので、もう誰にも会わない」と言ってアトリエから出てきませんでした。母と学校から帰ってきた妹が「お断わり係」になりましたが、何せ東京駅から一時間かかる立川駅を降りてバスに十五分乗る東京の田舎でしたので、素気なくお断りできず、一服休んでからお帰り戴いていました。

住んでいた団地の外れに立派な洋館があり、散歩でその家の前を通るたび、父は、「いつかこんな大きな家に住んでみたいものだ」と言っておりましたが、その度に母は、「掃除が大変で管理をするのも一苦労だ」と繰り返し答えていました。不思議なことに、その大きな洋館には表札が出ていなく、いつの間にか画商間でその家が「鷹山」の家だと噂が立ち始めました。間違えた画商達が朝早くから押し掛けているとの話を聞き、母と二人でお詫びに出かけると、その家の門柱に紙が貼られており、「この家は鷹山さんではありません」と書かれていました。家に帰り父にその話をすると、大喜びをし、次の日から来客があるたび洋館に寄ってきたかと聞くので、前よりも客の滞在時間が長くなってしまいました。丁度その頃、父を写真集に載せたいと写真家の林忠彦先生がお見えになりました。家の外で撮影すると林先生が希望されたので、父はあの洋館の前はどうかと提案しました。でも林先生は他人の家の前で撮っても、ちっとも面白くないと答えられ、せっかくの父の目論見もすげなく終わってしまいました。

その時の写真は、時々学芸員が美術館に飾ってくれていますが、父の憂鬱そうな顔は、多分あの洋館が背景に入っていなかったからと思われます。

洋燈（西洋ランプ）と父Ⅰ

立川の家に居た時に起きた絵画ブームは、私たちの生活を一変させました。作品の依頼を1年、2年先は当たり前で3年先の画料を置いていく画商まで現れました。母はそのような方々には丁寧にお帰りいただきながらも、そのあと「お金は欲しいけれど、パパが途中で死んでしまったら困るしね」と、訳のわからないことを言っていました。

父は昔から作品を先渡しをしていましたので、そぐわない話はお断りをしましたが、いつの間にか作品と画料が交換となりました。たまたま出かけたデパートで洋燈（西洋ランプ）を買い求めてきてからは、もうその魅力に取り付かれ、毎日のように洋燈を買いに都内のデパート、骨董屋巡りを始めました。

その数が10本近くになると飾っていた出窓がいっぱいになり、テレビや棚の上は無論のこと家中が洋燈で埋まりだし玄関から台所まで洋燈だらけでした。

もう飾る場所がなくなると父も気抜けしたのか「ランプ買い」がおさまりかけましたが、毎日のようにやってきた骨董屋のおじさん達までも顔を見せなくなりました。

私が連絡をすると電話の向こうから「いやお嬢さん、私どもは恥ずかしくって先生のところへ伺えないんですよ。持っていけば全部言い値で引き取ってくれた先生のお陰で、ガラス物やランプには少々目が肥えてきましたよ。そしたら今度は、どうしてあんなガラクタでも買い取ってくれたの

かと、先生に申し訳なくってね。先生が喜んでくれるものが手に入るまでは、お宅の玄関は跨げません」と言う言葉が返ってきました。その事を父に申しますと、父は嬉しそうに「これからは良い物がくるよ。人に頼んで買ってきてもらうんだ。これは欲しいが、あれはいらないと選り好みをしていたら、一点物の良品が出ても、引き取りの不安があれば買ってこないものだ。授業料は安い時に払っておくのに限る」と言いました。そして、「ものを集めるときは、気違いにならなければ集まらないものだ。所詮、一時預かりなんだから、好きなことができる幸せを味わっていたい」とも申しておりました。本当にそれからは、面白いほどに価値のあるガラス物がお嫁にやってきました。

しかし、なんと言っても、その宝物を自慢をしたくとも見せる場所さえなくなってしまい、ついに中野に移転することになりました。洋燈のために・・・。

洋燈（西洋ランプ）と父Ⅱ

洋燈のために引越をすることになり、父の終の棲家となる中野の家は、中野駅から歩いて3、4分の所にあります。今は建築基準法で禁じられていますが、30年以上も昔のマンションは図面の段階で売買されていました。1階の2部屋をL字形に買い、設計変更をして住むことになりました。

父の希望していた洋燈の飾り棚も壁面いっぱいに作られ、ちょっとしたアンティーク店のようでした。

中野の家はマンションながらも1階でしたので庭が20坪以上もありました。裏には、今はもうなくなりましたが、有名な料亭「ほとゝぎす」があり、その庭園の生い茂った樹木が、大きな山のような借景となり「軽井沢に住んでいるようだ」とよく父が座敷にすわると言っておりました。

忘れもしません立川の家から中野に引越をする前の晩のことでした。父が洋燈だけは別に運びたいと申しましたので、一足早く何日もかかって梱包をした洋燈を中野に運び入れました。

数が数ですから洋燈だけでも一日がかりで、夜になってやっとの思いで立川に戻りました。遅い夕食が済んで床に入っていたところ、父が突然「中野に置いてきた洋燈が心配だ」と騒ぎだし、真夜中に母と二人で車で中野に向かいました。私たちは、「箱に入って中身が見えない物を誰が盗むか」と話しながら、疲れで深い眠りに入りました。

翌朝、引越荷物とともに中野に行くと、父は命より大切な洋燈の箱の前で寝ずの番をしていたそうですが、母は大鼾をかいて昼過ぎまで寝ていました。

引越中は荷物の出入りがあったり、大工が来たり大変な事態の中、父は悠然と洋燈を磨き始め、一つ一つそっと飾り始めました。

あまりの量に工事の人がびっくりして「旦那さんはランプ屋さんですか」と声をかけると、父は嬉しそうに「ランプはランプでも魔法のランプを売っているのだ」と「アラジンのランプ」を沢山出してきました。淳朴そうな工事人は「そのランプでこんなお屋敷を出したんですか。いったい旦那さんはどこからやってこられたんですかい」と真面目な顔をして父を見ていました。「毎日精進をして仕事に励めば、いつかは必ずこのランプが願い事を叶えてくれるよ」と、数ある中で一番形の良いランプを帰り仕度をした彼に渡していました。

洋燈の陳列棚がいくつも出来、入れる場所があるまでは、父は気が変になったかと思うほど洋燈を蒐集し始めました。洋燈は高価なものですから、なかなかおいそれとは買えません。宝くじを買ったり、場外馬券を買ったりして一攫千金を狙っていましたが、不労所得はあてにできないと申し、何といっても仕事をするのが一番金になると言って朝から晩まで絵を描いていました。

父が愛でたランプの多くは作者の銘が入っていません。ガレー、ドーム、ナンシーなどのランプも無論ありますが、この銘の入らない洋燈達を父はことの外大切にしていました。自分の名前など残さずに、作品のみを残した職工達の心意気が潔よいではないかと父は申し、慈しみ大切に大切に扱っておりました。

名誉とか地位とか勲章など無縁で、又決して欲しがらなかった父は、自分の人生とランプ達の歴史を重ね合わせていたのかも知れません。しかし「無冠の帝王」と豪語した父の晩年は、七戸町が美術館をつくって下さったり、故郷の新聞社から栄誉ある賞を戴いたりして幸せな時を過ごしました。

現役で卒寿展を開催した折には、「絵筆一本、正々堂々の人生を歩めた幸せ」をお集まりの皆様に御礼を述べることもできました。

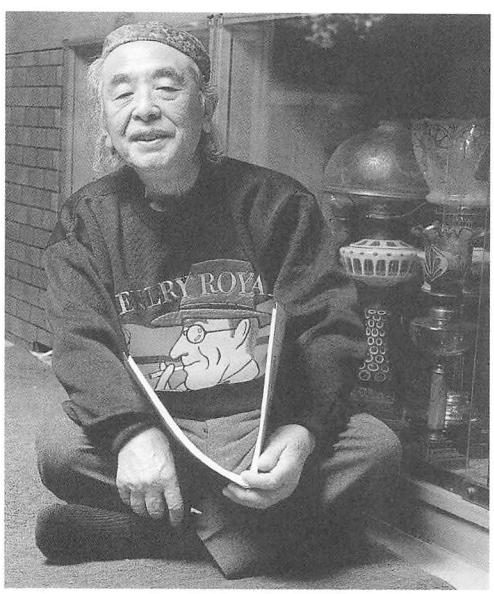
その時「自分の夢は二百年も生きている、あの洋燈達に灯をともすことなのです。しかし、精製度がよくなり高温になりすぎる今の油では、火をつけるとホヤが全部破れてしまうのです」と言って残念がっておりました。

美術館が出来上がり、父の作品と共に百点近い洋燈が七戸に嫁に行くことになりました。だんだんその日が近づいてくると、「大事な洋燈を手放したくない。だけど男の約束がある。いいものを嫁に出さねば見た人は、なんだこんなものかと言うだろう。しかし一級品は死んでも離したくない。」そう同じことを毎日言い続けるので、母は「男らしくない」と言って怒りだしました。しかし、父にとっては一大事であります。

いざ七戸に運び出す段になると大粒の涙をポロポロ流し別れを惜しんでおりました。

美術館の中にある「ランプ館」で一点一点、あの美しい光と、透きとおる輝きを見ていると、苦労をして集めながらも、「今、いっときの一時預かり」と、愛しそうにランプを見続けていた父が、すぐそこに居るような錯覚をしばし覚えます。

一度でもいい、洋燈達に火をつけたかったであろう父を偲べる幸せを、私は今、毎日ランプ館で味わっております。



ランプ棚の前で　（撮影：秋山庄太郎先生）

吉野毅先生と父

JR中野駅から早稲田通りを横切り哲学堂へ行く途中に薬師様があります。その境内で月1回骨董市が開かれ、父は毎月楽しみにしておりました。昼まで寝ている母も、とてつもない買い物をされたら大変と父と一緒に昼前に出かけていました。

何らかの戦勝品を手に入れると、途中の「蕎麦屋」で遅い昼食をとり、家にもどってから綺麗に洗って自慢する―。これがいつものパターンでした。

何年か通っているうちに父が、自分と同じ物を集めている奴がいると言い出しました。父が目をつけた物を買い求めようとすると、それは予約済みだと、どこの店でも言う。目利きの男がいるので探してこいと無理な注文をつけるのです。

仕方なく私は午後に散歩がてら骨董市に出かけました。そこで顔馴染みの人物に出会い、挨拶をすると彼が手にしていた物は、父が探しているガラス物でした。「吉野先生はよくお出かけになるの」と伺うと、「俺はこれが楽しみなんだ。朝早く来てまだ店も広げていない業者から、めぼしい物を見つけて手付け金を払い、こうやって午後また来るんだ」と自慢気に話されるのではありませんか。あっこれだ!とすぐ父に報告をすると、吉野氏を呼んでくれとのことで、電話を致しました。吉野毅先生は何事かと思っておいでになりましたが、父は自分が大切にしているローマングラスやガラスの笄（こうがい）や櫛、香水瓶など並べ出すと、突然吉野先生の目の輝きが変わってこられました。

何時間も父の自慢話を聞かされた先生は、それからすぐに大きな荷物を持って父の所にお見えになりました。今度は吉野先生の自慢話が始まりましたが、父はフンと言うような顔をして難癖をつけ始めます。同じギャマンでも自分の方がもっと上質で高価な物を持っていると棚の奥から出してくる姿を見て、3歳の孫とさほどの違いはないと思いました。

忙しい吉野先生が暫く見えないと「アンちゃんはこの頃やってこないが、金がなくて自慢する品も買えないのか」と父が憎まれ口をききます。すると、不思議なことに先生がぽっとお見えになります。

ある時、蒐集している「墨つぼ」を持って、いつものように「うんちく」をかたむけている吉野先生に向かって、突然父が「アンちゃんは大工か?」と尋ねるではありませんか。初めは冗談を言っているのかと思いましたが、父は本当に吉野先生が同じ二科会の彫刻部会員とは知らずに「骨董屋のアンちゃん」だと、ずっと信じて疑っていなかったそうです。

私が吉野先生の作品写真を見せると黙ってしまい、「あんなに彫刻家が似合わない男も珍しい」と負け惜しみを言っていました。

後年、日本の彫刻界でもあれほど実力のある作家は少ない、と言って二科展に行くと吉野先生の作品は必ず見ていましたが、地下にある彫刻室に行くことは階段が苦手な高所恐怖症の父にとって難儀なことでした。

10年前美術館ができ、その運営を財団法人で行うこととなり、吉野先生に理事の就任をお願いしたところ、快くお引き受けくださいました。

又、父の「デスマスク」を吉野先生が造って下さいましたが、身内でも尻込みをする作業を孫の雄介、龍一たちに手伝わせて父の最期を残して下さいました。

文字通り目に入れても痛くない程可愛がり愛した孫たちが、祖父との惜別の思いを「デスマスク」に認（したた）めたことに父はどれほどの満足をしたか、いつまでも吉野毅先生には感謝の念でいっぱいです。

鷹山先生と吉野先生（美術館にて）

父、鷹山宇一

50年間生まれ育った東京から、ここ七戸に移り住んで6年の歳月が流れました。

東京を出る朝は桜が咲き乱れ春爛漫でしたが、三沢駅で降りると大雪が降っており、日本列島の大きさを知りました。

半年近く居座っていた冬将軍がやっと春の女神に交替すると、一気に暖かい日が続き、あっという間に周りの景色が変わりました。まさに「遅く来る春ほど、強い春」を実感いたしました。

そして又、父宇一から受け継いだ遺伝子が、私の体の中で軽い身震いをした瞬間でもありました。

毎日通っている美術館で、静かに只一人父の作品に対峙していると、私共の家族の歴史が次から次へと思い出されていきます。

昭和30年代後半、ミニスカートが大流行し、私も流れに乗り遅れまいとお尻が見えるほどのスカートをはいていました。

「はしたない」、「みっともない」としかる母に、父は「何もはかないよりかはずっといい」と言って窘（たしな）めてくれていました。又、テストで二、三〇点しかとれないと、「何も勉強せずにそんなに点数を採ってくるなんてたいしたものだ。勉強すれば、すぐ満点なんか採れるのだから、本を好きなだけ読んでいればよい」と申し、何一つ心配をいたしませんでした。

昭和43年に初めて私は欧州に行きました。1ドルが360円、500ドルしか外貨の持ち出しができなく、私は立川基地から闇ドルを買って出かけました。日本がまだまだ貧しい時代で「円」など、どこの国も相手にしてくれない時でした。

ロンドンで、何色ものピーコックカラーで髪を染め帰国しました。

母は驚き、例の如く「恥ずかしい」、「みっともない」とわめいていましたが、アトリエから出てきた父は、開口一番「何と綺麗なのだ」と尊敬の眸で私の髪を見つめておりました。そして感嘆しながら「自己主張の第一歩はファッションから始まるのだ」と申しました。

「自分らしく生きるには、時には他人と違った場所に立つことも必要」、「人に見られても恥ずかしくない教

養を深めることが大切」と言い、異質のものを受け入れる「寛容な心」、他人が見えないことに「美を発見する目」を養う重要さを淡々と話してくれました。

大正デモクラシーのアカデミックな時代に多感な青年期を過ごした父は、真の自由、誠の幸せとはどのようなものかを承知していたのだと思います。

父の作品の一つに「小さな世界」があります。

長い間、子どもがなかった私は40を過ぎて男子に恵まれました。「鷹山」の姓を繋ぐ孫に巡り会えた父は、その大きな喜びを「小さな世界」で表しました。

生物の母体である海を主題に、波際に遊んでいる小さな蟹を手前に描き、その子蟹を見守るかの如く海上に蝶が飛び、遙か水平線には父の託した夢や希望が光り輝いている逸作です。

この絵の前に立つと父の溢れるばかりの愛情を感じると共に、夢の又夢であった我が子を初めて抱いた時の、胸締め付けられたあの感動が甦ってまいります。日々の雑多に流される私が、子育ての原点にもどれる作品でもあります。

「絵描きでは飯が食えない」と言って晩婚の父でありましたが母のお陰で長寿を得られ、旅立つ直前まで仕事をしておりました。

もう意識がない父の手を握り、じっと顔を見つめていると、時々、嬉しそうな顔をしたり、困った顔をしたりして、喜怒哀楽のいろいろな表情を現します。

今、父の脳裏には90年のおもいでが走馬燈の如く流れているのかと思った瞬間、私も父との思い出が、ぱあーと頭の中を駆けめぐりました。

息子が生まれて病院から父のもとに帰った時、父は赤ん坊を抱きながら「可愛いね、可愛いね、お祖父ちゃんと同じ申歳生まれだ」と大喜びをし、「人間は生まれてきただけで価値があるのだ。価値のある人生を必ず全うするように」とまだ目も満足に開かない赤子に向かって話しかけておりました。

「人は死ぬ時、金も名誉も地位も何も持って行かれない」とよく耳にしますが、今別れゆく父の顔を見ながら、この世を旅立つ時にもたった一つ必ず持って行かれるものがあるとわかりました。

それは「思い出」であります。「思い出」は、今まさにこの世を去る人も、それを悲別しなければならない家族も共有できる唯一のものであります。

家族とは「思い出づくりの共有者」だと思いました。

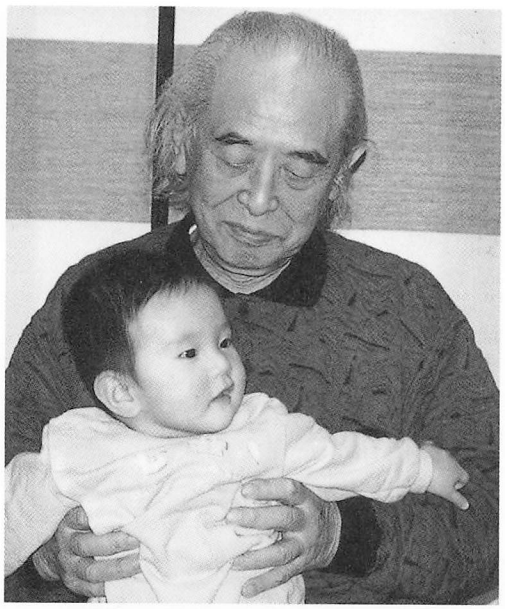
愛してやまなかった孫の雄介と龍一に、心残りのないよう四夜寝ずの看病をさせ、皆に手を握りしめられて静かに父が去って逝きました。

家族に見守られて歳の順に逝くことが、残されたものたちにどれほど心に平安を与えるか、そんな当たり前の幸せを教えてくれた父との別れでありました。

そして又、同時に子育ての最終目的は何かと気付かされました。それは、子どもが親孝行の真似事ができるまで、親は長生きをすることであります。

「風樹の嘆」と言う言葉がありますが、孝行をしたい時に親がいない子ほど悲しい者はいません。

私は何一つ親孝行ができませんでしたが、父が長生きをしてくれたお陰で孫を抱いてもらうことができました。「生まれてくるだけで価値がある」と言ってくれた父の言葉を重く受け止め、息子の壮央（いさな）や母との「思い出づくり」の日々の中で、私は私の価値ある人生を歩み続けています。



孫の壮央くんを抱く鷹山先生

会員の皆様へ

鷹山　宇一

昨夏炎熱のもとでの美術館開館式より早くも十ヶ月近くたちました。友の会の皆様には美術館発足と共に苦楽を共有して下さる同志としてご参加いただき心より御礼申し上げます。

私の九十年近い生涯はただ画業そのものに終始一貫したものでありました。持って生まれた性格がそのようにさせたのでしょうが、やはり自ら志した仕事を天与の職と定めたからであります。一度しかない人生を好きなように生きられ、晩年になって生まれ育った地にこのような熱い思いで迎え入れられた私の一生は言葉で言い尽くすことはできません。

「人はパンのみで生きるにあらず」の言葉通り美に対する憧憬が幼い頃より研ぎ澄まされるよう若い入場者が一人でも多く訪れてくれることを切に願っております。

開館日の記録的な暑さ、地震によるランプの破損と、美術館の歴史には事欠かないよう色々な出来事が起きてきますが、いつの日か皆様方と思い出話としてのひとときがもてますことを楽しみにしています。

平成7年4月20日（美術館名誉館長）

（会報第2号に寄せられたメッセージを再録致しました。）

幻想的な美術館夜景

友の会会員登録の更新と新規会員入会お誘いのお願い

本年も会員の皆様には、友の会運営に多大なお力添えをいただき、誠に有難うございます。

新しい年も鷹山宇一記念美術館の応援と会員の皆様方に芸術・文化に一層親しんでいただけるよう研修旅行、講演会などを企画し、微力ながらも地域文化に寄与していく所存でございます。皆様には一層のご理解とご協力を賜りたく、引き続き会員登録の更新をお願い申し上げます。なお、更新手続きは、美術館窓口と同封の郵便振替により随時行っております。

なお、本年度総会において規約が改正され、平成17年度からの会員の種別、会費、特典が次のように変更になっております。

○一般会員（従来と変更ありません。）

会費（個人）　年度会費3千円

特典

①無料入館券3枚。会員証提示により入館料2割引き

②ミュージアムグッズ1割引

③研修会、講演会への招待、優待

④他美術館等の視察研修への優待参加

⑤会報の配布

○特別会員

会費（個人・法人）　年度会費1万円

特典　一般会員特典に加えて

①会員証提示により個人・法人会員とも本人及び同伴者1名まで無料入館

②新規加入の方に画集1冊贈呈

○賛助会員

会費（個人・法人）　年度会費2万円

特典　一般会員特典に加えて

①会員証提示により個人・法人会員とも本人及び同伴者3名まで無料入館

②新規加入の方に画集1冊贈呈

③特別企画展の都度、招待券を贈呈

＝詳しくは、美術館までお問い合わせ下さい。＝

★会報10周年記念合本の発行について

★会報創刊第一号から記念号までを一冊に合本して有料頒布いたします。（一部の号はコピーとなります。）

・合本一冊一、〇〇〇円
　送料　五〇〇円

・申込期限
　1月30日（日）

・発行予定
　平成17年1月下旬

・申込先　美術館

◆編集後記◆

★10周年記念号の発行が遅れましたこと、会員の皆様に深くお詫び申し上げます。

★写真を整理していたら、思わず「若かったなぁー」とため息。合本は、10年の足跡を辿る資料となります。是非お申し込み下さい。

★今年の友の会企画事業は、1月の「イタリア・ルネッサンス美術紀行」の旅から始まりました。「次回の海外研修企画を早めに、暖かい時期に」との声が届いております。

★会員の皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集　E・T